

ビデオ映像を用いた 対人認知に関する基礎的研究

1. はじめに	5
2. 対人認知研究の概観	7
3. 対人認知研究の課題と体質心理学	13
4. 研究の目的・仮説と実験の概要	21
5. 刺激人物 (SP) の選定と刺激の製作	23
6. 予備実験	27
7. 第1実験 (ビデオ実験・写真实験)	33
8. 第2実験	43
9. 第3実験	45
10. まとめと考察	55
11. 引用文献	61

当モノグラフは、横田仁の指導のもと、伊藤隆一が行なった、実験研究の概略を報告するものである。当研究をまとめた論文により、伊藤隆一は、1990年12月12日、慶應義塾大学より学位を授与された。

また、当研究の一部は、日本心理学会において口頭発表されている(伊藤ら、1981、1983、1988、1989)。

当研究を行うにあたっては、さまざまな方々のご指導ご協力をいただいた。以下に名前をあげて、改めて衷心よりお礼申し上げる。

まず、慶應義塾大学新聞研究所 岩男寿美子教授、埼玉大学教育学部 梅津耕作教授には、副査として論文審査に参加していただき、審査の途上で、さまざまなご意見、ご批評をいただくことができた。

慶應義塾大学文学部 小林ポオル助教授、慶應義塾大学文学部 小谷津孝明教授には、研究全般にわたって有益で的確なアドバイスをいただいた。

慶應義塾大学文学部 古崎敬教授には、授業をお借りして何度もデータ取りをさせていただいた。

また、岩熊史朗君、兼高聖雄君には、SCT 診断、SAS の利用など、研究全般にわたって多大なご援助ご協力をいただいた。

個々の実験あるいはビデオ映像や写真の収集・編集、刺激の製作などにご協力いただいた方はかなりの数にのぼる。平野学君、川島真君、弘田直人君、小林和久君、坂爪裕君、勝森由香君、近藤敏康君、西村麻由美君、安藤洋二君、小野雅子君らである。特に、川島君には、写真の収集と編集に全面的に協力していただいた。弘田君は「感度実験」のパートナーであった。勝森君と坂爪君には、卒業研究として、刺激の製作と「第1実験」に全力投球していただいた。近藤君と平野君は、ビデオ映像の収集・編集、第1予備実験など、初期の研究活動において尽力してくださった。

さらに、古庄良源氏、河野直樹氏には、研究資料の提供などに協力していただいた。

そのほかにも、慶應義塾大学文学部 横田ゼミナールの10期~20期生の皆さん、ビデオ映像や写真に映っている「刺激人物」の皆さん、評価者になっていただいた多数の皆さん、そして、ビデオ映像の収集や資料・論文原稿の作成に協力してくれた伊藤ひろみ、その他、具体的に名前をあげなかった方々を含めて、有形無形のご支援をいただいた方は数多い。

上記の方々のご指導ご協力なしには、この研究は成り立たなかったと思う。改めて、衷心より感謝の念を表する次第である。

執筆者紹介

●いとう りゅういち (尚美学園短期大学専任講師)

●まきた ひとし (慶應義塾大学文学部教授)

1

はじめに

「普通人々は悪魔といえたいやせていて、細い顎に尖り髭をうすくはやしていると考えるのだが、一方肥っちょはどこか気立てのよい愚かさを備えていることになっている。陰謀をめぐらす者は背むしで軽い咳払いをする。年とった魔女は干乾びた鳥のような顔つきをしている。朗らかで淫らな雰囲気のある場所には、でっぴりとした騎士フェルシュタフが鼻を赤くし禿をびかびかさながら姿を現わす。常識あるおかみさんは、ずんぐりしてまんまるな姿で手を腰にあて、腕を張っている。聖者たちはひょろりとした姿で、手足は長く、眼光は鋭く、顔色は蒼ざめゴート人のように厳かな物腰だ。

手短かにいえば、節操高い人と悪魔とは尖り鼻で、ユーモアがわかる人は太い鼻をしていなければならないということである。これはどういう意味であろうか？ さしあたって、これだけのことはいえるであろう。つまり民衆の空想が幾世紀にもわたって語りつがれながら結晶化したところのものは、客観性をもった民族心理学的記録であり、おそらくは研究者にとっても多少注意を払うぐらいの値打ちのある大衆観念の沈澱物であるかもしれない。

だが、これはただ話のついでに言っただけのことである。」

長い引用になったが、これは、Kretschmer の『体格と性格 (Kretschmer, 1955)』の冒頭の部分である (相場均訳)。彼はここにいう「民衆の空想、大衆観念の沈澱物」に直接手をつけることはしなかった。それとは逆に、膨大な数の精神病患者の体質、気質、行動に関するデータを収集し、それを分析することによって、最終的には、人の体格 (体質) と性格 (気質) の関連を実証的に明らかにしていった。

従来、体質と気質との関連については、骨相学とか相貌学という名称のもと、数多くの研究が成されてきた。しかし、Kretschmer 以前の研究は、今日的な意味で実証的な科学研究とはいいいがたいものがほとんどである。体質と気質との生物学的・心理学的関連を探索する研究分野を体質心理学と呼ぶことにすれば、体質心理学を体系づけた功労者は、第1に Kretschmer、そして第2に Sheldon ということになる。これらの研究者の業績については、あらためて第3章で簡単に触れることにする。

彼らの業績は、体質と気質の間の本来的な相関

関係をもとめた点にあった。しかし同時に、彼らは、研究対象とはしなかったが、ある身体的特徴を持った人物がどのようなパーソナリティを持った人物として捉えられがちであるか、また逆に、ある種のパーソナリティ特徴を持った人物がどのような身体的特徴を持っていると考えられがちであるか、という、一般の人々が持っている他者認知における信念の体系のようなものを直観してもいた。

1950年代になると、心理学の中にも、こうした信念の体系のようなもの、あるいは、Kretschmer のいう「民衆の空想、大衆観念の沈澱物」を、直接対象とした研究領域が生まれた。それが、対人認知あるいは印象形成といわれる分野である。中でも、Heider (1958) は、素朴心理学 (naive psychology) と呼ばれる体系のなかで、こうした人々の間にある個人的な人間観について概略次のように論じている。

人が社会的環境の中でうまく適応していくためには、人間の行動の仕方に関してある程度理解していることが必要である。多くの人は日常的な経験を通して、そうした知識を獲得する。そしてその知識はその人なりに体系化され、また、新しい情報を取り入れ修正される。人は、多くの他者のパーソナリティを理解していると信じている。その中には誤解も含まれていよう。しかし多くの場合、ある程度の確信をもって、「あの人はこういう人だ」と考える。素朴心理学の内容のうち、こうした個性記述的な側面は、「暗黙のパーソナリティ仮説 (implicit personality theory; IPT と略す)」と呼ばれる。それは、「人間にはこれこれのタイプの人がある」という考え方、あるいは「こ

ういう人はこんな時こんな振舞いをする」という、素朴な、しかし、かなり安定した信念である。人は、その持っている IPT を、必ずしも自発的に言語化することはできない。しかしこれは、人が他者を理解しようとする時にはかなり重要な働きを果たすのである。

人が他者を理解しようとする時には、限られた手がかりからその人に関する印象を形成することになる。手がかりになるものは、大きく、直接的なものと同接的なものに分けられる。理解しようとしている他者のことを刺激人物 (stimulus person; SP と略す) ということにすると、直接的な手がかりは、いうまでもなく、SP に直接接触した際に受け取る知覚的情報のことである。一方間接的な情報とは、写真・録音・ビデオ映像などによる SP の容姿・姿勢・声・行動・表情・服装などに関する情報、SP について解説した言語的な情報、SP の行動の結果である絵画・文章・筆跡などになる。我々は、こうした情報をもとに他者についての印象を形成しようとする。

同一人物との接触が増せば手がかりも増えるが、情報の追加は SP のパーソナリティ像の変容には必ずしも直線的には結びつかない。そこには常に印象を形成する側の主観が介在している。そしてその主観的な要因の中で最も主要なものが、IPT である。

当研究は、Kretschmer (1955) が「これはただ話のついでに言っただけのことである」と述べた、一般の人々が持っている他者認知 (印象形成) における信念の体系 (IPT) について、実証的に明らかにしていこうとするものである。

2

対人認知研究の概観

1. 対人認知の次元性に関する研究…………… 7
2. 対人認知における手がかりの優位性
に関する研究…………… 9

我々が他者との相互関係を円滑に進めていくには、まず、お互いに相手の存在を認識し、相手がどのような人物であるかを理解する必要がある。こうした個人の属性や心理過程を知る働きを、対人認知 (person perception) あるいは印象形成 (impression formation) という。

従来の対人認知の研究領域は、他者の情動の認知、性格の認知、集団内の対人関係の認知など、広範囲にわたっている。しかしここでは、当研究目的に関連する性格 (パーソナリティ) 認知を中心に、理論的検討を行っていくことにする。なお、第2章執筆にあたっては、瀬谷 (1977)、広岡 (1989) などの文献も参考にしたことを付記する。

1. 対人認知の次元性に関する研究

第1章でも述べたように、個人は一般に、自らの人生体験から人間のパーソナリティというものについての素朴な信念の体系を持っており、これに基づいて、ある程度限られた手がかりから他者の全体的パーソナリティ像を形成しようとする。このような体系は、Heider (1958) や Bruner & Tagiuri (1954)、Cronbach (1955) らによって、

「暗黙のパーソナリティ仮説 (IPT)」と名づけられている。対人認知を歪める要因として従来から指摘されている光背効果、寛大化傾向、あるいは、「頑固者は怒りっぽい」「はっきりと自己主張する者は能力が高い」などといった、人々が共通に持っているステレオタイプの複数の特性間の関連も、こうした IPT の一側面として理解することができる。また最近では、性格特性間の関連だけでなく、身体特徴や行動特徴と性格特性との関連もその中に含めて考える傾向が有力である (大橋ら, 1977)。

対人認知に関する系統的な研究史の端緒となったものは、Asch (1946) によって行われた研究とってよい。

しかし、最近の対人認知 (性格認知) 研究の焦点は、人のどんな側面が対人認知の対象になりやすいかという対人認知の次元性の問題、あるいは、対人認知がさまざまな手がかりをどのように用いて達成されるのかといった手がかりの優位性の問題、などに移行しているように見うけられる。

最近の対人認知の次元性に関する研究では、複数の次元からなる認知空間を対人認知の枠組みと捉え、特に性格に焦点をあてて、そこにみられる

構造的特質の理解をめざした研究が数多く行われている (Levy & Dugan, 1960; 飯島, 1961; Osgood, 1962; Norman, 1963; Pedersen, 1965; Walters & Jackson, 1966; Passini & Norman, 1966; Bieri ら, 1966; Rosenberg ら, 1968; Kuusinen, 1969; Lay & Jackson, 1969; Warr & Haycock, 1970; 大橋ら, 1973; Jones & Rosenberg, 1974; 中里ら, 1976; 林ら, 1977; Rosenberg, 1977; 津村, 1977; 林, 1978a; 林, 1978b; 松原・内田, 1979; Scott ら, 1979; 林, 1979; Kim & Rosenberg, 1980; 若林, 1982; 小川・吉田, 1983; 林ら, 1983 など)。

しかも研究方法に関しては、その試みは非常に多岐に渡っている。以下、Schneider (1973) なども参考にしながら、簡単にみていくことにしたい。

第1に、研究に用いられた SP としては、知人・友人・好きな人・嫌いな人といった、あらかじめ知っているが評価の際には目の前にいない現実の人間 (Rosenberg ら, 1968; Jones & Rosenberg, 1974; 林, 1978b; 林ら, 1983; 小川・吉田, 1983 など)、数十人の初対面の人の相互指定評価 (Norman, 1963; 中里ら, 1976 など)、顔や全身の写真 (Secord, 1958; Levy & Dugan, 1960; 榎田・榎田, 1971; 林ら, 1977 など)、形容詞のリストや短文など言語による人物の解説 (Asch, 1946; 大橋ら, 1976 など)、行動の結果としての筆跡や声の録音 (榎田, 1983; Warner & Sugeran, 1986 など) などがあげられる。また、有名人や漫画のキャラクター、職業名による指定、といったステレオタイプ的な SP の提示 (林, 1978a; 落合, 1983 など)、線画やシルエット (Brunswik, 1956; 斎藤・沼上, 1971 など) も見られる。SP を用いず、パーソナリティ特徴を表した特性語間の類似性を求めた研究もある (Pedersen, 1965; Walters & Jackson, 1966 など)。さらに最近では、わずかではあるが、行動している SP の映画あるいはビデオ映像が用いられたりもするようになってきた (Gross, 1961; Ekman ら, 1980; 広兼・吉田, 1984 など)。

認知の対象となる SP の違いと IPT の構造的差異との関係を問題にした研究もいくつか行われ

ている。

IPT の因子構造が SP の差異によっては変化しないことを主張している研究には以下のようなものがある。Secord & Berscheid (1963) は黒人と白人に対する性格評価データを分析し、Mulaik (1964) は現実の人物、ステレオタイプ的人物、特性語による刺激などによる相違を検討した研究で、また、Passini & Norman (1966) は熟知している人物と未知の人物とを比較した研究で、認知の次元に差のないことを明らかにしている。さらに、Rai & Srivastava (1976) は、18歳の SP を、白黒写真で評価者に呈示した場合、同じ SP について説明した文章を評価者に読ませた場合、その文章を読んだテープを評価者に聞かせた場合、という3条件を比較して、評価者の性格認知に大きな差が現れなかったことを報告している。

一方、松原・内田 (1979) は、父母、兄弟、友人など8種類の SP を評定させ、また、落合 (1983) は検事、弁護士といった職業名を対象として、SP の違いが認知次元の重みづけ (次元の重要度) に反映されるという見解を示している。また、Rai & Srivastava (1977) は、若い女性を SP にして、直接評価者に会わせた場合と写真で提示した場合では、その性格認知に差が出ることを報告している。

さらに、対人認知における諸次元と、Osgood ら (1957) の SD 法における内包的意味の3次元とを比較して、対人認知次元に対する言語的要因の介在を検討した研究も少なくない。

たとえば、Jones & Rosenberg (1974) や林 (1978b) は、現実の人物の対人認知次元が Osgood らの3次元と一致することを報告している。

特に林 (1978b) は、性格認知次元の一貫性の問題に着目し、いくつかの研究によって抽出された次元の分類・整理を行っている。彼は過去に行われた6つの研究 (Levy & Dugan, 1960; 飯島, 1961; Norman, 1963; 大橋ら, 1973; 中里ら, 1976; 林, 1978a) で用いられた79特性尺度上で SP を評定させたデータを因子分析し、性格認知において基本的に機能する次元として、「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」という

3次元を抽出している。そして、従来の研究で抽出された諸次元はこれら主要3次元の下位次元として位置づけることが可能であり、またこの基本3次元は、Osgoodら(1957)のSD法によって一般的に抽出される3つの因子、評価(E)・潜勢力(P)・活動性(A)因子と対応していると主張している。

また、Norman(1963)およびPassini & Norman(1966)は、目の前にいる人間であれば、既知の人物の印象形成でも未知の人物の印象形成でも、Osgoodらの3次元と重複する5次元が使われることを報告している。さらに、D'Andrade(1965)やHakel(1969)は、Norman(1963)の用いた評価項目(形容詞によるパーソナリティ特性)を一对比較によって1組ずつ類似度評定させる実験を行って、Norman(1963)の成果と一致する5次元を抽出している。

しかし、対人認知次元がOsgoodら(1957)の3次元とは強く関連していないことを示唆する研究も多い。Osgood自身、Wareとの共同研究(Osgood(1962)に収録)において、意味の3因子に重複する次元を含む8次元を抽出している。しかも、意味の3因子に対応する3次元合計の寄与率は20.5%とかなり低いものであった。こうした傾向はフィンランドで追試したKuusinen(1969)や、イギリスでのWarr & Haycock(1970)などにおいても見いだされている。

第2に、資料の収集方法という観点から見ると、圧倒的に多いのは、代表的なパーソナリティ特性をならべたチェックリストをあらかじめ研究者が用意して、評価者にチェックさせる方法である。しかし中には、評価者の自由記述を分析する方法(Jones & Rosenberg, 1974; Rosenberg, 1977; Kim & Rosenberg, 1980; 林ら, 1983など)や、SP間の類似性を一对比較によって直接求めるもの(Nygren & Jones, 1977など)、特性語間の類似性を直接求めるもの(Pedersen, 1965; Walters & Jackson, 1966など)もある。

第3の傾向としては、性格認知次元の一般性・個別性あるいは評価者の個人差の問題への関心の深まりという点があげられる。本来、IPTは1人1人の持っている個人的な信念の体系であった

(Hastorfら, 1965)。しかし、従来の対人認知の次元性に関する研究においては、誰でもが持っている一般的な傾向としてのIPTの共通次元の抽出・決定にウェイトがおかれてきた。

一方、他者を正確に認知する能力と認知する主体の個人差との関係は、古くから「共感能力あるいは認知的複雑さ」の研究として数多くおこなわれてきた(Vernon, 1933; Allport, 1937, 1961; Estes, 1938; Dymond, 1949, 1950; Taft, 1955; Kelly, 1955; Bieri, 1955; Bonarius, 1965; Banister & Mair, 1968)。しかしこうした研究には、認知の正確さの基準と評価された性格の内容の問題、認知者に提示された情報の量と内容の問題など、研究上の問題点を指摘する声も少なくない(Vannoy, 1965; 瀬谷, 1977)。

そこで最近では、アプローチの方法を変えて、対人認知の次元性の研究の枠組みの中で、個々の認知者の持つ個人的なIPTの構造的特徴を理解していこうとする研究が行われるようになってきた。たとえば、なんらかのパーソナリティ変数によって評価者を分類し、彼らが対人認知においてどう異なるかを分析したもの(Beach & Wertheimer, 1962など)、共通次元に対する個々の認知者のウェイトについて検討するために、Carroll & Chang(1970)の個人差を考慮した三相MDSであるINDSCALモデルを適用している研究(Nygren & Jones, 1977; 林, 1979; 松原・内田, 1979; 小川・吉田, 1983など)、次元の様相は認知者によって異なるという想定のもと、Tucker & Messick(1963)のpoint of view分析を用いて認知次元の個人差を検討しているもの(Pedersen, 1965; Walters & Jackson, 1966など)、個々の認知者ごとにMDSやクラスター分析を行っているもの(Rosenberg, 1977; Kim & Rosenberg, 1980; 林ら, 1983など)などである。

2. 対人認知における手がかりの優位性に関する研究

これまで述べてきた研究は、対人認知において機能する基本的な認知次元の問題について検討していた。しかし、対人認知、特に性格認知が、さ

さまざまな手がかりをどのように用いて達成されるのかといった問題は、新しい研究領域としてようやく手がつけられ始めたところといってよい。

当該研究領域では、「日常、初対面あるいは交際の少ない相手の性格を推測する際には、外部から容易に観察される顔・声・話し方・体格・服装・動作・姿勢などといった外面的な特徴を手がかりとして用いる」という仮説に立って、IPTの領域の中で、さまざまな手がかり情報と性格特性との対応が検討され始めている（林, 1978a; 広兼・吉田, 1984）。

いわゆる相貌特徴（特に顔）と性格特性との関連に関しては、Brunswik (1947, 1956) や、Secord ら (Secord ら, 1954, 1955, 1956; Secord, 1955; Bevan ら, 1956; Stritch & Secord, 1956; Secord, 1958) の研究が有名である。

また、Johnson (1955) や大橋ら (1976) は、一対の SP の特徴（性格特性か相貌特徴かのいずれか）を記した短文を形容詞尺度（相貌特徴か性格特性かのいずれか）上で評定させたデータを用いた研究を行っている。そして、人々が個々の相貌特徴と性格特性の間に仮定している関連性は予想以上に強いものであること、性格から相貌を推定する場合の方がその逆の推定よりも評価のばらつきが少ないことを報告している。

さらに、大橋ら (1972) の 90 名の写真刺激による研究、大橋ら (1973) や林ら (1977) の 4 名の写真刺激による研究、林 (1978a) の 90 の漫画キャラクターの写真を用いた研究もほぼ同一系譜にのった研究であるが、これらの研究では、認知者が、相貌特徴、性格特性ともに、それぞれいくつかのまとまりを持った群にまとめあげ、群と群との間に一定の関連性を仮定していることが示唆されている。たとえば、林 (1978a) では、相貌特徴の「眉の太さと顔のつくりの荒さ」「顔の大きさと凸凹のなさ」「目もとの鮮明さ」「眉と口もとの鋭さ」といった次元と、性格特性の「個人的親しみやすさ」「力本性（活動性+意志の強さ・エネルギー）」「社会的望ましさ」という次元との間の相互関連が報告されている。

一方、相貌特徴以外にも、声に関して、Aronovitch (1976)、体格に関して、Wells & Siegel

(1961) や斎藤・沼上 (1971) など、いくつかの手がかり研究が行われている。

これらの研究では、いずれも一つの手がかりのみが用いられており、それらの手がかりにもとづく具体的なステレオタイプの様相が報告されている。

しかし実際の社会的場面では、複数の手がかりが膨大な量の情報として同時に認知者に与えられ、しかもそれらの手がかりから推測されるパーソナリティ印象が一致しない事態にしばしば遭遇する。我々は、そうした事態であっても、SPの統合的なパーソナリティ像を形成する。おそらく、実験室場面でみられる単一の手がかりと性格特性との結びつきの強さと、現実の印象形成場面における複合的な手がかりの優位性との間にはかなりの相違が存在するに違いない。

対人認知の構造に関する研究のもっとも新しい研究の流れは、こうした手がかりの優位性に関する一連の研究群といってよい。相貌特徴や顔の表情、話の内容、声の調子その他を手がかりとした優位性の研究は多い (Depaulo ら, 1978; Ekman ら, 1980; Zuckerman ら, 1982; 広兼・吉田, 1984; Warner & Sugarman, 1986; 1978 年以前の研究については Depaulo ら (1978) に詳しい)。これらの研究を通覧すると、複合的な手がかりが与えられた場合に一番優位に働く手がかりは相貌特徴のように思われる。しかし、Ekman ら (1980) は、顔、内容をコントロールした話声、身体動作という 3 つの手がかりを用いて実験を行い、どの単一手がかりも相対的に強い優位性を持たないことを報告している。また、広兼・吉田 (1984) は、顔、声、体格、服装を手がかりとして用いた実験で、声>顔=服装>体格という手がかりの優位性を見いだしている。

さらに、Warner & Sugarman (1986) は、相貌（顔と肩）のスライド写真、声のテープ、転写筆跡をそれぞれ単一手がかりとして提示し、それと性格の諸次元——社会的評価 (social evaluation)・能力的評価 (intellectual evaluation)・活動性 (activity)・潜勢力 (potency)・情緒性 (emotionality)・社交性 (sociability)——との関連を検討している。彼らは、それぞれの手がかりが性

格の異なる次元で優位に働いているという見解を表明し、相貌特徴は社会的評価や能力的評価の次

元と、声は活動性の次元と、筆跡は潜勢力とそれぞれ関連していることを報告している。

3

対人認知研究の課題と体質心理学

1. ヴィデオ映像を SP として用いること	13
2. SP として適切なヴィデオ映像の内容, および行動の表出的側面	14
3. 評価項目としてのパーソナリティ特性の内容	15
4. 対人認知の次元と性格認知の次元, および Kretschmer-Sheldon の体質心理学	16

第2章では、比較的最近の対人認知研究の概要について述べた。しかし、その成果に関しては、統一的な見解がほとんど打ちたてられないまま現在に至っているといつてよい。そこで、第3章では、より自由な立場から、検討されるべき対人認知研究の課題をいくつか設定し、その対処方法あるいは当研究の指針となるべき考え方について、述べていくことにしたい。

ここで論じる課題は以下のようなものである。

- (1) ヴィデオ映像を SP として用いること
- (2) SP として適切なヴィデオ映像の内容
- (3) 評価項目としてのパーソナリティ特性の内容
- (4) 対人認知の次元と性格認知の次元

1. ヴィデオ映像を SP として用いること

すでに述べたように、対人認知研究ではさまざまな SP が用いられてきた。ここでは、こうした SP の違いが対人認知に及ぼす影響について検討しながら、刺激としてのヴィデオ映像の特質について考えていきたい。

Rai & Srivastaba (1976, 1977) は、写真を見た場合、パーソナリティを説明した文章を読んだ場合、同じ説明を録音したテープを聞いた場合、という3種類の間接的な印象形成事態を比較した場合には評価に差が現れないが、目の前にいる実在の人物の印象形成と間接的に写真を見ての印象形成では評価に有意な差が現れることを報告している。

また、実験場面におけるコミュニケーション・メディア、あるいは deception の手段としての、対面、ヴィデオ (テレビ電話)、電話、手紙の役割を比較した研究 (Williams, 1975; Werner & Latané, 1976; 三井, 1976; Zuckerman ら, 1982; Manstead ら, 1984 など) では、非言語的な手がかりの多さに対応する形で、対面 > ヴィデオ > 電話 > 手紙の順に効率がよく、特に、声の情報がある手がかりとなることが報告されている。

さらに、Denis & de Pouqueville (1976-77) は、24 種類の具体的な行動を記憶させる手段として、言語による説明、絵による説明、写真1枚による説明、写真3枚による説明、16 mm フィルム映画による説明、という5種類の説明法を比

較している。結果は、絵と 16 mm フィルム映画による説明が最も高い想起率を示したという。

こうした報告をまとめてみると、人間を直接目の前にしての印象と、間接的方法によって提示された人間の印象との間には、なんらかの違いがあるように感じられる。

また、間接的な方法の中では、対人認知分野以外のわずかな研究を見る限りにおいては、ビデオ映像は他のメディアに比べて、現実の人間の持っている特徴を、言語的な特徴も非言語的な表出的特徴も、評価者の前に、よりの確に、より多く提示することができる道具のように思われる。また、刺激統制という観点からみても、写真や言語刺激に比べれば複雑だが、実在の人物を多数の評価者に同じ条件で対面させる手続きよりは単純である。

Allport (1961) のいうように、対人認知研究は我々の現実の他者認知機能を探求するものである以上、用いられる SP には現実の存在する人間が最もふさわしい。しかし、実験事態での刺激統制という側面をも考えあわせると、実在の人物と同じような多様な情報を持っている映像を、複数の評定者の前に同じように提示できるビデオ映像は魅力的である。

2. SP として適切なビデオ映像の内容、および行動の表出的側面

ここでは、まず、適切な SP の数と SP の選択基準の問題、次に、SP のビデオ映像の内容の問題について若干論じてみたい。

研究の主眼が対人認知における次元性の探索にあるのならば、用いられる SP は、理論的に仮定されるあらゆる認知次元において差異が現れるようにして、できるだけたくさん収集するのが望ましい。しかし現実には、授業のクラスを単位にせいぜい百名程度の SP を収集し、その中からさらに「適当な」SP を絞り込んで実験を行っている場合が少なくない。こうした SP の収集方法は、特に SP が少数の場合には、SP の差異の保証が不完全になる。

そこで、次善の策として、適当な外的基準を設

けて客観的に差異の明確な SP 群を選択する方法が考えられる。外的基準を設けた研究としては以下のようなものがあげられる。Kretschmer-Sheldon の 3 類型を基準としたものとして、Sheldon らの作成した体格写真集『Atlas of men (Sheldon, 1954; Sheldon ら, 1970)』を用いた Wells & Siegel (1961) や Burdick & Tess (1983)、顔写真刺激を用いた榎田・榎田 (榎田・榎田, 1970, 1971; 榎田・榎田, 1970)、筆跡刺激を用いた榎田ら (榎田ら, 1981, 1981, 1982, 1987; 榎田, 1983) などがある。また、肥満者に関するステレオタイプ研究 (Staffieri, 1967, 1972; Caskey & Felker, 1971; Benson ら, 1980)、身長ステレオタイプ研究 (Dannenmeir & Thumin, 1964) などもある。

第 4 節でやや詳しく述べるように、Kretschmer-Sheldon の体質心理学は、人間の身体・行動・性格その他の間の比較的包括的で客観的な関連を明らかにしている。そこで当研究では、Kretschmer-Sheldon の体質心理学の内容を基準にして、できるだけ大きな個人差が保証されるように、体質・気質を網羅した、できるだけ多数の SP を選択・採用するようにつとめることにした。

次に、SP のビデオ映像の内容の問題について若干論じてみたい。

今日まで、対人認知研究では、実際の人物を評価する場合を除いて、情報量の多い刺激材料ほど条件統制を厳しくし、さまざまな要因をできるだけ単独で独立変数として取り出せるようなデザインを考えてきたのが通例である。声を刺激とする研究では、決められた文章や台詞をマイクの前で話したものが刺激として使われてきた。写真刺激に対しては、現実の対人認知の場面に近いという利点と同時に、そこに含まれる情報量の膨大さが欠点として指摘されてきた。

対人認知研究にビデオ映像が使われるようになったのは、1980 年代に入ってからといってよい。しかし、数少ないビデオ映像を用いた研究のなかでも、Ekman ら (1980) や広兼・吉田 (1984) では、複数の SP が、あらかじめ用意された台本にしたがって台詞をいうという、「疑似」

会話状況のビデオ映像が実験に使用されている。

人間研究においては、パーソナリティの研究であっても、印象形成の研究であっても、被験者であろうと評価者であろうと、リラックスして自由に振舞う、その人らしさが自然に表出された状態の人間を必要とする。パーソナリティ研究領域においては、こうしたその人なりの行動の様式のことを行動の表出的側面あるいは表出行動という。また、社会心理学でも個人差の現れる行動という意味で、動作や表情、話し方のことを表出行動と呼んでいる。

行動の表出的側面について特に関心を示したのは Allport (1961) であった。以下、Allport の見解を要約した槇田 (1983) を参照しながら、表出的側面について説明する。

ふだん何気なく歩いたり、話をしたり、文章を書いたり、というような我々の行動の中には、実は2つの要素が含まれていることが多い。1つは駅へ向かって歩くとか、何か報告をするとか、意見を書くといった、いわばやっていることの中身である。これを物事に対処するという意味で行動の対処的側面 (coping aspect) あるいは対処行動 (coping behavior) と呼ぶ。もう1つは中身に関係ない、その人独特の歩き方とか、しゃべり方、あるいは文章表現の仕方である。これはいわば、その人独特の癖のようなものであり、我々はそれを見たり聞いたりすることによって、その人を識別する。これは、つまり、その人の個性が表出された部分であり、行動の表出的側面 (expressive aspect) あるいは表出行動 (expressive behavior) と呼ぶ。

通常の場合、我々の動作にはこの両方が含まれている。どちらか一方だけということはありません。そして、このような行動の表出部分、すなわち癖のようなものは、知らず知らずのうちに、その人であったように、自然にできあがったものであり、意識的に行っているものではない。従って不随意的であり、簡単に変えられないものである。だからこそ、その人の個性が現れた部分といえる。

つまり、我々の行動にはすべて、その「内容」

と「仕方」が含まれている。これを対処的側面と表出的側面と呼ぶ。あるいは、“what”と“how”ともいえる。

この両者の相違点を Allport (1961) は以下のようにまとめている。

- (1) 対処行動は目的を持ち、特定の動機づけを持つ。表出行動はそうではない
- (2) 対処行動はその当面の必要と事態によって決定される。表出行動は、より深い個人の構造を反映する
- (3) 対処行動は形式にのっとなって引き起こされる。表出行動は自然に発現する
- (4) 対処行動は比較的容易に制御される。表出行動は変えることがより困難であり、しばしば制御不能である
- (5) 対処行動は普通の場合、環境を変えんことを目的とする。表出行動は、たまたまある効果をもたらすことはあっても、何も目的としてはいない
- (6) 対処行動は、自動的な技能を使用することはあっても、典型的には意識的である。表出行動は一般的に我々の意識下にある

ここで強調したいことは、対人認知研究においては、個人の自由な表出を妨げるような条件統制は、結果的に誤った結論を導く可能性を高めるということである。そうした問題を解消するのに最良の方策は、評価者の面前に SP をおいて、評価データをとることであろう。しかしこうした方法では、多数の評価者を用いようとするれば、逆に、評価者ごとに受け取る情報が異なってしまう問題が生じる。おそらく最も現実的な方策は、表出的側面のよく現れている、普段の SP の状態に近い映像をあらかじめ収録し、これを刺激として多数の評価者に提示する方法ということになるのではないだろうか。

3. 評価項目としてのパーソナリティ特性の内容

IPT には、文化的・社会的な共通性がある。本来、IPT は認知者1人1人の持つ対人認知の枠

組みであるが、現実には、一般に共通な枠組みとして捉えられる傾向にある。池田 (1987) が指摘しているように、対人認知は意味認知と個体識別の両方を目的とした行動である。しかし、社会心理学の研究対象としての対人認知は、文化・社会的に共通な IPT の分析に終始し、個体識別の視点をないがしろにして来たようにも思える。こうした問題点は、SP の選択にも、評価項目の選択にも見られる。前者はすでに述べた通りであり、後者は、評価項目を選択する際の、人間の個性記述に関する配慮の足りなさという問題である。少数の「SP 間の類似度評定実験」などを除けば、SP の評価は数十のパーソナリティ特性を表す形容詞を並べたチェックリストへの評定によって行われている。こうした研究においては、本来、あまり多くない数の、しかし、社会文化的に妥当性のある項目群が用意されねばならない。従来に対人認知研究では、評価項目の選択は研究者の恣意性が強く、ばらばらで、そうした保証はほとんどないに等しい場合が多い。

最近、評価項目の恣意性を減少させるための努力の1つとして、評価者に、SP の印象を自由記述させる方法が広まりつつある (Jones & Rosenberg, 1974; Rosenberg, 1977; Kim & Rosenberg, 1980; 林ら, 1983 など)。しかし、こうした方法も、多数の SP に対して、多数の特性語を記述するよう求めると、評価者に相当の負担をかけることになる。評価者に対する過重な負担は、データを歪める要因ともなる。さらに、特性語を取捨選択するための使用頻度という一見客観的な基準も、使用頻度は低いが重要な対人認知の次元を見落とす原因となる (松原・内田, 1979)。

従って、現在の段階では、まず、評価者の負担を考慮しながら、特性語を広く収集し、ある程度客観的で妥当な基準で取捨選択し、比較的少数の評価項目に整理していく方法が最も妥当なように思われる。

それと同時に、もちろん、個々の評価項目ごとに、多くの評価者が一般的に用いている言葉かどうか、評価者ごとに意味の違いがないかどうか、SP の個体識別に本当に貢献しているかどうか、といった内容の検討を行う必要もある。

4. 対人認知の次元と性格認知の次元、および Kretschmer-Sheldon の体質心理学

齊藤 (1983) は、Beach & Wertheimer (1962) の研究にもとづき、対人認知の内容 (次元) として次のような項目をあげている。

[外面の認知]

- (1) 身体的認知 (性別, 体格, 容姿など)
- (2) 行動・表情の認知 (行動, 表情, ことば, 物腰, 装いなど)

[内面の認知]

- (3) 社会的背景の認知 (家庭, 職業, 民族, 生育歴など)
- (4) 性格の認知 (基本的な気質や狭義の性格, 社会的性格など)
- (5) 社会的活動の認知 (態度, 関心, 欲求など)
- (6) 能力の認知, 評価 (能力, 才能など)
- (7) 社会的相互作用の認知 (被認知者が認知者を含む他者をどう認知しているかなど)

1960年代には、外面特徴は、対人認知研究の枠組みの中に、有力な次元として存在していた。しかし、対人認知研究が広範囲の領域に広がるとともに、研究内容は次第に、他者の表情と情動の認知、性格認知、集団内の対人関係の認知などに分化していった (広岡, 1989)。最近の性格認知研究では、表情や行動は、手がかり情報としての位置を与えられているに過ぎない。

しかし、外面特徴は本当に正確に認知可能なものなのであろうか。体格や身長、相貌特徴が、光背効果や他者との対比効果によって歪んで認知されることはよく知られている事実である。同様に、動作や表情に関しても、情動認知研究は必ずしも一貫した成果を示してはいない。

こうした点から考察すると、対人認知の次元性に関する研究においては、外面の特徴も認知者の主観性に依存している認知と考えて分析を行う必要があるように思う。そこで本研究では、対人認知研究の原点に立ちかえり、もう一度、外面の認

知と内面の認知を同質のものとして取り扱うことにしたい。

こうした立場に立つ時、パーソナリティ研究領域から、外面特徴と内面特徴との客観的な関連について最も有用な知見を提供してくれるのは、Kretschmer (1955) や Sheldon ら (1940, 1942) の体質心理学である。

Kretschmer は、門弟らとともに膨大な数の症例を積み上げ、体格（体質）と性格（気質）との関連を素質生物学的な見地から経験的に研究することにより、性格学を自然科学的に組織だてようとした。彼は多くの精神病者を観察しているうちに顕著な体格型が存在することに気づき、それが二大内因性精神病である分裂病と躁うつ病に対応していることを発見した。それを出発点として、彼は、さらに正常者においても、体格型と気質型とが一定の関連を持っていることを経験的に証明しようとした。

Kretschmer によれば、体質研究は相関研究であり、遺伝によって規定された特定体質の心身における表現型である気質と体格とは、当然一定の相関関係をしめすことになるという。彼はまず体格型を決めるために、身体各部を組織的に精密に測定し、写真をとり、記述し、これを体質表に記録した。こうしたデータを「数的計算によって支えられた直感的な類型化」によって分類し、肥満型・細長型・闘士型という3種の主要体格型を設定した。これらの体格型と躁うつ病・分裂病・てんかんとの関係を見ると、明らかに両者の間に一定の関係があることが見いだされた。

彼はその後、健康者の体格型と性格の間にも同様の関連があることを見だし、これを上述の3体格型と、循環気質・分裂気質・粘着気質という3気質類型との関係にまとめた。

図表 3-1 に男性の各体格型の模式図とその主要な体格特徴を示す。

また、図表 3-2 に、3気質による、気分および心的感性、精神的速度及び緊張、精神運動性、社会的態度の現れ方の違いをまとめて示す。

Sheldon も、Kretschmer と同様、体質心理学を展開したが、その方法は若干異なっている。彼は、実験心理学的手法を用いて、はじめから健康

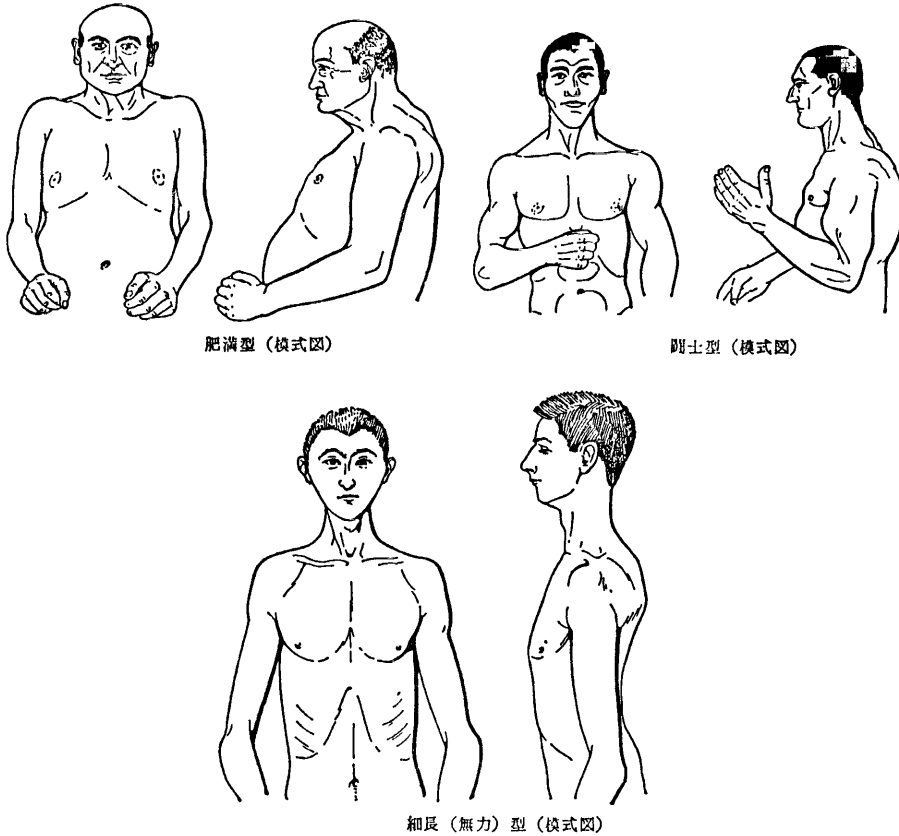
者の体質と気質との関連を追求している。

Sheldon によれば、体質とは、教育、習慣、文化といった環境的圧力によって修正されることの少ない、個人の比較的固定的な変化しない面のことをいう。すなわち、体型、生理、内分泌機能などである。

彼はまず 4000 名の男子学生についての体格の精密な記述を行った。つぎに、胎生期の内胚葉・中胚葉・外胚葉に着目し、この3要素の相対的優越性によって、内胚葉型・中胚葉型・外胚葉型という3種類の体格型を決めた。内胚葉型は、消化器、内臓の発達の顕著な、しかし骨や筋肉などの組織のあまり発達していない、一般に脂肪ぶとりの体型である。中胚葉型は、骨や筋肉といった体組織のよく発達した、がっちりとしきしまった体型である。外胚葉型は、皮膚組織、感覚器官、神経組織が際だって発達した、背が高く、やせて、胸のうすい体型である。Sheldon は3要素の相対的優越性によって3つの体格型を表したのであるが、実際にはこれらの要素はそれぞれいろいろな強さで現れる。そこで、彼はこの基本的要素の現れ方の強さをそれぞれ7段階に評価して、内胚葉・中胚葉・外胚葉の順に、7-1-2 のように記述した。

つぎに、気質型であるが、彼は、文献によってパーソナリティを表す言葉を集め、それを650の特性にまとめた。さらにこれを整理して50項目の特性を選び出し、彼がよく知っている33名の青年について7段階に評価した。それを因子分析にかけて、50特性を3つのクラスターに分類した。さらにこのクラスターに該当すると思われる78の特性を選定し、これを用いて100名の男子大学生について評価した。そのデータを再び因子分析にかけて、最終的に3つのクラスターにそれぞれ20項目ずつの特性を該当させ、これを気質尺度とした。Sheldon の60項目の気質尺度を図表 3-3 に示す。

3つのクラスターの内容は次のようなものであった。第1のクラスターは、慰安・大食・社交・愛情をもとめるタイプである。彼は、これを内臓を優先するタイプということで内臓緊張型とよんだ。第2は筋肉活動を熱望し、精力的に自己主張



肥満型 (模式図)

闘士型 (模式図)

細長 (無力) 型 (模式図)

各体格型の主要な体格特徴 (男性)

	軀幹の割合	体表面の浮出し	四 肢	頭部と頸部	顔 面	発 毛
肥満型	短い、厚い彎曲した胸郭。鈍い肋骨角。	よく発達した脂肪組織のための、まるいやわらかな形態。	やわらかい、比較的短い四肢。骨細の短く幅広い両手両足。	比較的大きな角のとれた頭部。平な頭頂の輪郭。短く太い頸部。	陰影のない、幅広く赤い顔面。横顔の変化にとぼしい。	しなやかな頭髪。禿げる傾向。終末発毛は中から多。
闘士型	幅広い、がっしりした両肩。比較的狭い骨盤をもつ梯形の軀幹。	ごつごつした骨格の上に、強性なもり上った筋肉の浮出し。	強く、骨ばった腕と脚、手足は大きい。ある場合は肢端チアノーゼ。	角ばった長頭。斜に強く張った僧帽筋のある自在に動く強い頸部。	いかつい、骨の凸凹がはげしい顔面で、顎の先がとがる。長卵形。	ゆたかな頭髪。終末発毛は他の型との差別がない。
細長型	平で長い脚郭。尖った肋骨角。比較的幅のある骨盤。	皮下脂肪組織が少なく、やせて筋ばる。	長いほっそりした四肢に、長い幅の狭い手足がつく。	比較的小さな頭部。長く細い頸部。	蒼白で幅狭い顔面で短卵形。尖って短い鼻。時によると角ばった横顔。	粗い頭髪。時に毛皮帽子毛。終末発毛は少。

図表 3-1. Kretschmer の 3 類型の体格模式図と、その主要な体格特徴 (男性の場合)

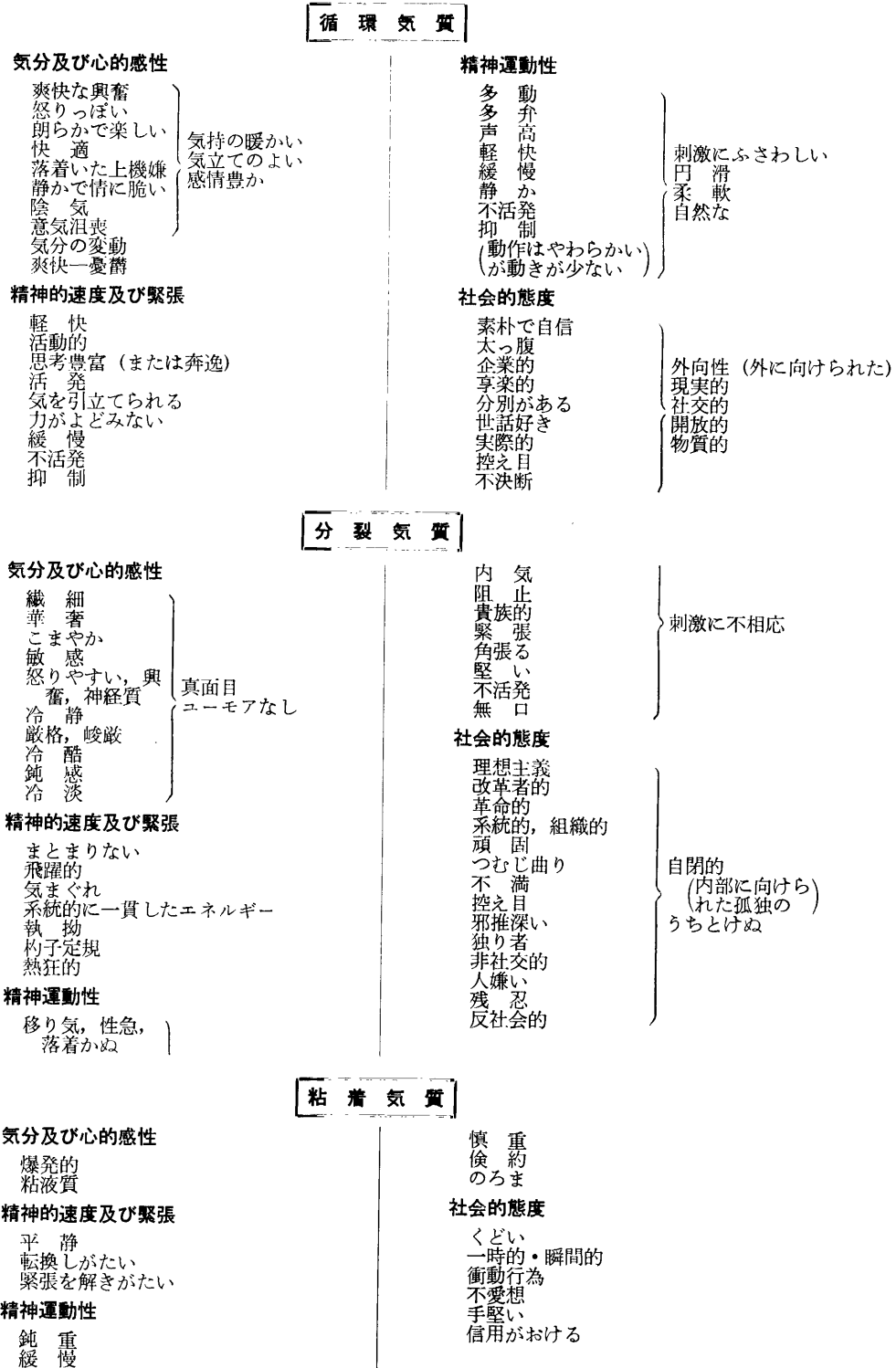
(Kretschmer (1955) より)

し、また冒険を好むタイプである。従ってこれを身体緊張型とよんだ。第3は極端な抑制・禁止がめだち、社会的接触を避けるタイプである。これは頭脳緊張型と呼ばれた。Sheldon の研究によれ

ば、内胚葉型-内臓型、中胚葉型-身体型、外胚葉型-頭脳型間の相関係数はそれぞれ 0.79 以上の値を示している。

Kretschmer と Sheldon の研究を比較すると、

図表 3-2. Kretschmer の 3 類型と、気分及び心的感性、精神的速度及び緊張、精神運動性、社会的態度 (楨田 (1983) より)



図表 3-3. Sheldon の気質尺度 (60 項目) (Sheldon (1942) より)

第 I 群 内臓緊張型	第 II 群 身体緊張型	第 III 群 頭脳緊張型
1. 姿勢と動作がゆったりしている	1. 姿勢と動作が荒々しい	1. 姿勢と動作が強く抑制されている
2. 身体的安楽が好き	2. 身体的冒険が好き	2. 生理的反応が度をこえる
3. のろい反応	3. 精力的な性質	3. 早過ぎる反応
4. 食べることが好き	4. 運動が必要で好き	4. 引っ込んでいるのが好き
5. 社交化した食事	5. 支配するのが好き、権力を渴望する	5. 心が激しやすく過敏で心配しすぎる
6. 消化するのを楽しむ	6. 危険と機会とを好む	6. 感情を外に表わさない、感情の抑制
7. 上品な儀式が好き	7. 大胆率直な態度	7. 目や顔の動きを気にしている
8. 社交好き	8. 闘争に対する肉体的勇氣	8. 人間恐怖
9. 誰にも親切である	9. 荒々しい攻撃性	9. 社交的反応の抑制
10. 愛情と承認とを強く求める	10. 冷淡な心	10. 習慣がなかなかできない、日常のこともうまくできない
11. まわりの人々に注意している	11. 閉所恐怖	11. 広場恐怖
12. 円滑な感情の流れ	12. 気むずかしくはないが残忍性	12. 態度を予測できない
13. 寛容	13. 抑制のない声	13. 声をおさえる、物音を何でも立てないようにする
14. 自己満足	14. 苦痛に平気	14. 苦痛に過敏
15. 熟睡	15. 一般に喧嘩	15. よくねむれないくせ、慢性疲労
16. 鍛えられてない性質	16. 年に比してふけてみえる	16. 態度や風采が若々しい
17. 円滑な楽な感情の疎通、内臓型の外向性	17. 精神の水平的分裂、身体型の外向性	17. 精神の縦の分裂、内向性
18. 酒を飲むとくつろいで社交的となる	18. 酒をのむと荒々しくなり攻撃的となる	18. なかなか酒に酔わない、また鎮静剤もあまりきかない
19. こまった時に人に相談する	19. こまった時は行動を求める	19. こまった時に孤独を求める
20. 幼少期と家族関係とに注意をむける	20. 青年の目標と活動とに注意をむける	20. 人生の後半に注意をむける

前者は価値にまで踏み込んだ、やや過度に包括的なパーソナリティ像を記述しているのに対し、後者のパーソナリティ像はかなり行動的側面に限定されている。しかし、体格・体質型と気質型および両者の関連に関しては、ほぼ同一の枠組みを提示しているといつてよい。

Kretschmer (1955) や Sheldon ら (1940, 1942) の体質心理学研究に対しては、従来より批判も多い (たとえば, Stagner (1961) 中の, Child (1950) など)。しかし現在では、Kretschmer の研究は膨大な数の実験心理学的データによって支えられており (Kretschmer (1955) に詳しい)、Sheldon の研究にも、Domey ら (1964)、Parnell (1958) や Burdick & Tess (1983) など彼を支持する研究が増えてきている (古い研究に関しては、Domey ら (1964) に詳しい)。

当研究では、SP の選定にあたっての基準として、体質心理学の成果を用いることにした。実際には、Kretschmer (1955)、Sheldon ら (1940,

1942) の体質心理学の内容を体系的にまとめた、槇田、佐野らの研究成果 (佐野・槇田, 1972, 1986; 槇田, 1983) を選択基準として用いた。ここでは、アルファベットを用いた名称が各気質類型につけられている。分裂気質・頭脳型のことを S の気質という。循環気質・内臓型のことを Z の気質という。粘着気質・身体型のことを E の気質という。槇田らの性格診断基準の概要を、第 5 章に、図表 5-1 として示す。これが、当実験の気質類型に関する SP の選択基準である。

池田 (1987) の指摘を待つまでもなく、最近の対人認知研究においては、IPT の一般特性や共通次元に関する議論あるいは評価者の個人差の問題が中心課題となっており、一部の外的基準を設けた研究を除いては、SP の個人差を論じた研究は少ない。当研究では、評定に先立って、SP の属性に関して、体質心理学に基づく情報を収集してあり、SP の個人差を論じることが可能である。

4

研究の目的・仮説と実験の概要

1. 研究の目的・仮説	21
2. 実験の概要	22

1. 研究の目的・仮説

第3章で述べたような課題と取り組むために、次のような研究の目的と仮説を立て、一連の実験的研究を行うことにした。以下、研究の目的と仮説を、段階を追って箇条書きする。

- (1) はじめて他者と接した時、我々はその他者に対してさまざまな印象を作り上げる。こうしたいわゆる第一印象は、どのような枠組みになっているのか。また、認知の正確さはどの程度のもなのか。このような疑問を実証的に解明していくことを目標に、対人認知（印象形成）に関する実験的研究を行う。当研究では、従来の対人認知研究の問題点を点検し、新たな対人認知の枠組みの構築をめざす
- (2) SP 選択の基準として Kretschmer や Sheldon の体質心理学の体系を導入する
- (3) SP はできるだけいろいろな属性の差異をカバーするような形で選択する。そのために、中年男性、青年男性、青年女性と、性・年齢条件の異なる SP を用意する。SP のその他の属性に関する情報も事前に収集しておき、SP の

クラスターを説明するための変数として利用する

- (4) SP についてのコントロールは (2)・(3) で述べた2条件のみとし、ほとんど自由な表出を保証したビデオ映像を刺激とする。ビデオ映像の有効性を検討するために、コントロール条件として、動きの見られない写真刺激を用意する
- (5) 次元性の検討に際しては、外観の印象と内面の印象を同質の指標として扱う。印象評定にはチェックリスト法を用いる。ただし項目は、評価者の自由記述を内容分析し、整理したものを使用する
- (6) チェックリストの評定データを因子分析して、評価者に共通な IPT の枠組み（対人認知の次元）を明らかにする。それは、外観から内面まで、SP の広い領域の属性を含むものになるであろう
- (7) 実験を繰り返しながら、対人認知次元がクリアに抽出されるように、チェックリスト項目を整理していく
- (8) 最終的に、体質心理学の内容に沿った評価の次元が抽出され、あるいは、SP が体質心理

学の内容に沿った形で類型化できれば、対人認知の研究領域だけでなく、体質心理学に対しても、新たな知見を提供することができよう

2. 実験の概要

当研究では、第 I 予備実験から第 3 実験まで、合計 6 つの実験を行った。SP の選定と刺激の製作について解説する第 5 章を含めて、ここで、実験の概要と当論文の構成についてふれておくことにしたい。

第 5 章では、SP の選定と刺激の製作について報告する。3 つの予備実験では、いずれも 10 名（うち 1 名は練習用）のビデオ SP を用いた。3 つの本実験（第 1 実験～第 3 実験）では 55 名ないし 46 名（うち 1 名は練習用）のビデオ SP を用いた。また、第 1 実験では、統制用に、25 名（うち 1 名は練習用）の写真刺激も使用した。

第 6 章では、3 つの予備実験について報告する。

第 I 予備実験では、榎田・櫃田 (1971) の対人認知チェックリストを用いて、SP 9 名のビデオ映像を評価し、対人認知実験におけるビデオ映像の有効性について検討した。

感度実験では、第 I 予備実験のデータに評価者のパーソナリティ（気質の 3 類型）要因を加え、ビデオ映像を用いた対人認知事態における評価者の感度の問題について検討した。

第 II 予備実験では、SP 10 名（うち 1 名は練習用）のビデオ映像を用いて、25 名の評価者に SP の外観・内面の印象の自由記述を求めた。収集した記述を整理して、評価項目のカテゴリーから対人認知の内容を推測し、また、第 1 実験に使用するチェックリスト (1) を作成した。

第 7 章以降の 3 つの章が、本実験についての報告である。

第 7 章では、第 1 実験について報告する。第 II 予備実験の結果から作成された 65 項目のチェックリスト (1) を用いて、複数の評価者に 54 名のビデオ映像と 24 名の写真に対する印象評定を行わせた。データを分散分析や主成分分析にかけて、チェックリスト項目の分析・整理や対人認知の次元性に関する予備的な検討を行った。同時に、対人認知研究の道具としての、ビデオ映像と写真の違いについて比較・検討した。

第 8 章では、第 2 実験について短く報告する。第 1 実験の結果から作成されたチェックリスト (2) を用いて、複数の評価者に 45 名のビデオ映像の印象評定を行わせた。データを因子分析にかけて、対人認知の基本次元の抽出を試みた。また、基本次元の中で SP がどのようなクラスターに分類されるか、検討した。

第 9 章では、第 3 実験について報告する。最終的に整理された 33 項目のチェックリスト (3) を用いて、複数の評価者に 45 名のビデオ映像の印象評定を行わせ、第 2 実験までの研究成果の再検討・確認を行った。

そして最後に、以上の実験から得られた知見を踏まえて、第 10 章で、研究成果のまとめと考察について述べることにした。

なお、当研究では、多変量解析の計算には、慶大三田計算センターの FACOM M-760/8 と汎用統計パッケージ SAS (SAS Institute, 1985; 竹内, 1987) を使用している。また、検定などの計算には、SAS および NEC/PC9801VM とパソコン用統計学プログラムパッケージ HALBAU (柳井・高木, 1986) を使用している。

5

刺激人物 (SP) の選定と刺激の製作

1. ヴィデオ用 SP の選定と刺激の製作……23
2. 写真用 SP の選定と刺激の製作……25

1. ヴィデオ用 SP の選定と刺激の製作

槇田を中心とする研究グループは、事前の了解を得て、SCT セミナー（慶大産業研究所主催）の「模擬面接」の面接者と被面接者の両方を VTR で撮影することにした。模擬面接は、入社試験の面接場面を想定し、企業人事担当者を主とするセミナー受講生を面接者、ボランティアの学生を被面接者とする、応用編としての SCT トレーニングである。そこでは、被面接者はあらかじめ SCT を提出させられる。セミナー受講生はその SCT を読んだ上で、当日書き手に面接し、パーソナリティを総合診断することになる。

ビデオ映像は、1 人あたり、正面の全身像、正面の上半身像、側面像などを含む 5 分ほどのものをとった。1980 年から 1984 年の間に、約 250 名の男女学生、会社員、OL などのビデオ映像とスナップ写真、SCT その他のサイド・インフォメーションが収集できた。当研究のビデオ、写真刺激は、おもにこれらの中から選択されている。

これらの人物に関しては、著者、その他数名の

大学院生らで、パーソナリティの診断を行った。診断基準は、図表 5-1 に示したようなものである。すなわち、気質類型 (Kretschmer-Sheldon の 3 類型、以下、S-Z-E と略記する) の判定、狭義の性格類型 (ヒステリー・神経質、以下 H-N と略記する) の強さの判定が中心である。なお、詳しい診断方法については、佐野・槇田 (1972, 1986)、槇田 (1983) などを参照されたい。

この中から、予備実験では、SP として、気質条件と性・年齢条件を組み合わせた、図表 5-2 の 9 つのセルに該当する SP 9 名 (500 番台の SP 番号) と、練習用の SP500 を選ぶことにした。

そこで、気質が典型的な S-Z-E と診断され、体型もそれらしい人物を、各性・年齢条件に該当する SP 候補の中から搜した。中年男性は 30 歳前後から 40 代の会社員、青年男性は大学生、青年女性は大学生あるいは 20 代の OL という範疇である。また練習用には、あまり目だたない平均的な (典型的でない) 若い女性を搜した。SP には、いろいろな意味で目だつ人物を使うことは避けた。青年女性の E や青年男性の S などは該当する人物が見つからず、やむを得ず、つてを頼って大学や企業を搜し、SP を決め、模擬面接とは異なる

図表 5-1. 気質・性格類型の具体的内容, 診断基準 (佐野・楨田 (1986) より)

S: 分裂性気質 細長型

内閉性……関心は自分自身の内に向けられ, 外に対しては比較的関心がない。自分の世界を持っており, 一人でいても寂しさを感じない。

→非社交性, 孤独性, 冷たさ, 自我の強さ, 利己的, 抽象・空想, 思考性

両面性……「敏感」と「鈍感」の両面性を持っている。

「敏感な面」に少し触れられても, 鋭く反応するが, 「鈍い面」には土足でふみこまれても, 平気である。

→辛らつ, 繊細, 過敏, 鈍麻, 無関心, 無精, ぐず

知能の高い人は「カミソリ」の切れ味にたとえられ, 理論的に鋭い考え方ができる人が多い。いったん心を開くと豊かな内面生活を見せてくれる。知能が低くなると, S特有の鋭さはなくなり, 内面も乏しくグズといわれるような性格になってくる。

Z: 循環性気質 肥満型

同調性……人々と共に生き, 開放的である。いわゆる「お人よし」と言われる傾向がある。Sとほぼ反対の気質を持つと考えてよい。

→社交性, 融和性, 現実性, 大まか, 不注意

両極性……元気で働いていたと思うと, 理由もなくしょんぼりしたり, 気分や感情に周期的な波がある。

→快活, 陽気, おしゃべり, 憂鬱性, 無口

知能の高い人は回転の速い頭の働きをし, 活動的で, 生きている現実の問題を追いかけするのが好きである。オーガナイザー向きといえる。知能が低くなると, おっちょこちょいで先のことは考えず, 自分の感情や目のことで行動する, いわゆる「ガラッパチ」タイプとなる。

E: 粘着性気質 闘士型

粘着性……コツコツと粘りつよく, 几帳面でものごとに熱中する。Sは馬力がなく, Zはスタートダッシュに力をだし, Eは出足が遅いが, 一度走りだすといつまでも走りつづける。馬鹿正直で頑固な面がある。

→執着性, 非融通性, 根気強さ, 几帳面

爆発性……ぎりぎりまで粘る反面, 急にカッとなる爆発性をもつ。いったん怒り出すとあとをひくことが多い。

→興奮性, 蓄積性

礼儀正しく, 社会的常識に富んでいる場合が多い。社会通念や規律には拘り定規に従う傾向がある。知能が高い人は, 緻密な頭を持ち, 手堅く粘り強く仕事を進める。低くなるに従い, 爆発の傾向が強まる。

H: ヒステリー

小児性……社会化が十分でなく, わがまま, 移り気, 無反省等の未成熟な感情を持ったまま大人になった人に多い。

→被暗示性, 好き嫌いが激しい, わがまま, 移り気

顕耀性……「オレが, オレが」という傾向である。虚栄的になると, 単なる方便のために嘘をつくようになる。

→虚栄, 勝ち気, 人気取り, 派手好き, 口惜しがり

N: 神経質

不安定感……自分に自信がもてず, 自分を責める傾向が強い。疲れやすく長続きせず, 途中で諦めてしまう。

劣等感……自分のすることに自信がもてず, 内輪に行動する傾向が強い。過度に考え込んでしまう場合がある。

→心気性, 取り越し苦労, 自責性, 強迫, 作業不全, 弱気

この診断においては, 気質類型として S, Z, E の 3つを基本的なものとして把握する。H, N は成長過程において形成され, 基本型に色どりを与える性格としてみている。

ってしまうが, 自由会話場面の 5分程度のビデオ映像を撮影した。

こうして, 10名の SP を選定し, 予備実験用のビデオテープを製作した。

第 I 予備実験 (感度実験を含む) 用ビデオテープは, 次のようなものである。まず, プールしてあるテープから, SP 1人あたり, 正面全身像, 正面上半身像, 側面像を含む 3分程度の無音のヴ

図表 5-2. ビデオ SP の条件と, SP 番号

		性・年齢		
		中年男性 (MM)	青年男性 (YM)	青年女性 (YF)
気 質	S	※*3	※*5	※*7
	Z	※*6	※*8	※*1
	E	※*9	※*2	※*4

※には, 5 または 6 の数字がはいる。5 ならば予備実験用 SP, 6 ならば本実験用 SP である。ただし, 両者は重複している。

*には, 1~6 の数字がはいる。ただし, 例外的に, SP647 は「YF E」の SP である。

ビデオ映像を編集した。編集にあたっては, プライバシーに関する内容, 評価に明白な手がかりを与えるような内容などについては, 避けるよう留意した。これを, SP500 から SP509 まで, 順番につなげた。そして最後に, エンハンサを使用して, 各 SP の画面の頭に, SP 番号を「SP500」のようにインポーズした。

第 II 予備実験用テープは, SP は第 I 予備実験の人物と同一であるが, 内容はいくらか異なっている。まず, SP 1 人あたり 2.5 分程度の音の入っているビデオ映像をつくった。音声と時間以外は, 第 I 予備実験のそれと同様の内容のものである。次にこれをもう一度繰り返し録画した。つまり, 2.5 分の映像が 2 回繰り返し提示されるように編集したわけである。

また新たに, モニターの色合わせ用のパターンと, 評価者の反応をなるべく基準化させるための「General View」と称する 5 分間の映像を作った。

色合わせ用のパターンは, 黒・緑・青・黄・赤の色紙を並べたものである。

「General View」は, 実験用 SP か否かにかかわらず, 数十名の男女の姿を約 10 秒ずつつづつ 5 分間の映像である。これを評定前にみせて, 評価者の反応をある程度基準化しようと考えた。

テープには, まず, 色合わせ用のパターン, 5 分間 (2.5 分×2) の練習用の SP500 の映像, 5 分間の General View を録画し, その後ろに, SP501 から SP509 の 5 分ずつの映像 (2.5 分×2)

を順に入れた。そして最後に, エンハンサを使用して, 各 SP の画面の頭に SP 番号を「SP500」のように入れ, また, 繰り返しの画面には画面の左上に小さく SP 番号と repeat の頭文字「R」を「500R」のように入れた。これが第 II 予備実験用テープである。

第 1 実験以降の本実験では, 図表 5-2 の各セルに 6 名ずつ, 合計 54 名 (600 番台の SP 番号) と, 予備実験と同じ練習用の SP (SP500) を準備することにした。

予備実験の SP と同様の基準で SP を選択した後, 本実験用のビデオテープを製作した。ただし, 予備実験用の SP は, すべて本実験用の SP として用いることにした。

第 1 実験以降の本実験用に用意されたビデオテープは, 第 II 予備実験用とほぼ同一内容のテープ 6 巻のセットと考えればよい。

まず, SP 1 人あたり 2 分程度の音の入っているビデオ映像をつくった。次にテープの同じ部分を繰り返し録画して別に 3 分程度の映像をつくった。つまりおなじ SP に関して, はじめに 2 分, そのあとに 3 分のほとんど同じ映像が, 続けて提示されるようにしたわけである。

そして, 第 1 のテープ (SET 1) には, 色合わせ用のパターン, 練習用の SP500 の 5 分間 (2 分+3 分) の映像, 5 分間の General View の後に, SP611 から SP619 の 5 分ずつの映像 (2 分+3 分) を順に入れた。そして最後に, エンハンサを使用して各 SP の画面の頭に SP 番号を入れ, また, 繰り返しの画面には画面の左上に小さく SP 番号と「R」を入れた。

同様にして, 第 6 のテープ (SET 6) の SP669 まで, 各々 10 人の SP の映像からなる 6 巻のテープを製作した。(注 1……章末参照)

2. 写真用 SP の選定と刺激の製作

第 1 実験に用いた写真用 SP の選定も, ヴィデオ用 SP の選定時に同時に行った。しかし, 3 つの性・年齢条件のカテゴリーのうち中年男性に関しては, 写真を収集しておかなかったため, それを除いた, 図表 5-2 の 6 つのカテゴリーに 4 人

ずつ計 24 名, それに練習用の 1 人 (SP00; SP 500 とは異なる女性である) を加えた合計 25 名の SP の写真を用意することにした。原則的にビデオ用 SP と重複するようにしたが, S の男女と E の男性で SP が足りず, 3 名分のみ, 別途捜して写真を撮ったので, 異なる SP の写真も混じることになった。

写真は SP ごとに数枚のサービス版のスナップ写真が撮られていた。しかし, 人物の大きさも姿勢も縦横も, なんらコントロールされていなかっ

た。白黒の写真もカラー写真もあった。

当研究では, そのまま, SP ごとに, A4 版の白色の台紙に 2~3 枚の写真を貼ったものを刺激とした。写真实験用 SP の番号は, 練習用 SP を含めて, 2 桁である。

(注 1) SP647 (SP 07) は, SP の選択時には, 図表 5-2 の基準通り, 「YF S 群」に分類されていた。しかし, その後, 再診断の結果, 実際には「YF E 群」に該当することが明らかになった。そこで, SP647 (SP07) は, 基準とは合致しなくなるが, 「YF S 群」から外し, 「YF E 群」の SP とした。

6

予備実験

1. 第 I 予備実験	
——ビデオ映像の有効性の検討——	27
2. 感度実験	
——評価者の感度の問題の検討——	28
3. 第 II 予備実験	
——チェックリスト (1) の作成——	29

1. 第 I 予備実験

——ビデオ映像の有効性の検討——

まずはじめに、ビデオ映像を用いて、気質 (Kretschmer-Sheldon の 3 類型) を外的基準とする対人認知研究が可能かどうか、ビデオ映像の有効性について検討するための探索的な実験を行ってみることにした。ここでは、SP の条件として、気質、性・年齢の 2 つを取り上げ、また、評価条件として、評価者の性別、映像の色の有無 (カラー映像か白黒映像か) の 2 つを検討してみた。

第 I 予備実験では、第 5 章で述べた、10 名 (うち 1 名は練習用) の SP のビデオ映像を刺激として用いた。

評価用紙には、写真刺激を用いて、Kretschmer-Sheldon の 3 類型を外的基準とする対人認知研究を行った、楨田・櫃田 (1971) の評価用紙をそのまま使用した。これは、曾野 (1971) が楨田、佐野らと開発したもので、Z-S-E-H-N と精神的分化度 (mental differentiation; D あるいは

diff. と略記する。いわゆる頭のよさをはかる尺度である) について、10 項目ずつの特徴を質問紙形式で並べたものである。さらに、年齢を記述させたり、学歴、健康度、好意度などを評価するための項目が付け加えられている。

評価者は慶大の学部学生 100 名である。条件別の内訳は、図表 6-1 の通りである。彼らは、パーソナリティ理論に関する知識は持っていない。また、SP に面識もない。

テレビモニターの前に集まった 1~10 名の評価者に評価用紙を配り、評価の仕方に関する簡単なインストラクションをしたあと、はじめに、練習用 SP である SP500 の無音の映像を 3 分間見てもらった。この時、半数の評価者には 12 インチの白黒テレビを使った白黒条件で、残り半数の評価者には 14 インチのカラーテレビを使ったカラー条件で、SP の印象を形成してもらった。3

図表 6-1. 第 I 予備実験 評価者数

		男	女	計
白	黒	27	23	50
カ	ラ	31	19	50
	計	58	42	100

図表 6-2. SP の気質条件各群の評定平均値と群間の比較

	SP の群			群間の比較 (t-検定)		
	Z (N=3)	S (N=3)	E (N=3)	Z と S	Z と E	S と E
Diff.	12.7	14.3	11.5	**	*	**
Z	15.5	8.9	11.6	**	**	**
S	6.7	12.6	9.3	**	**	**
E	12.1	10.5	11.6	**	—	**
H	10.4	14.6	11.9	**	**	**
N	8.5	11.7	10.2	**	**	**
年 齢	24.6	24.4	24.6	—	—	—
学 歴	2.8	3.0	2.7	**	—	**
健 康	1.6	0.9	1.4	**	**	**
好 意 度	1.3	0.8	0.9	**	**	—
(真の年齢)	25.1	24.8	23.2	*: 0.01 ≤ P < 0.05 (両側)		
(真の学歴)	3.0	3.0	2.7	**: P < 0.01 (両側)		

分間の映像が終わったら、直ちにテープを止め、評価用紙を使つての評価を求めた。全員の評価が終了したら、次の SP501 について同様の手続きを進めた。これを 10 回繰り返して、SP509 まで順に評価データをとった。実験は、複数の評価者に一緒に映像を見てもらう集団実験の形で行った。SP の提示順は 100 名の評価者全員に同一である。

図表 6-2 に、SP の気質条件ごとの評価者全員の評定平均値と、群間の比較を示す。D-Z-S-E-H-N への各評価得点は、30 点満点の数字である。年齢は、評価者の推定の平均値である。学歴は、中卒を 1 点、高卒を 2 点、大卒を 3 点とした評価の平均値である。健康度及び好意度は、0~3 点の 4 段階（健康なほどあるいは好意度が高くなるほど点数が高くなる）で評価させた評定平均値である。

また、表の下に、年齢と学歴の真の値を一緒に示してある。

ここでは、Z の SP に対する Z 得点、S の SP に対する S 得点が、他の群に対する評価得点より有意に高い。さらに、S の SP に関しては、H や N の得点が高く、逆に、健康度の評価が低い。また、Z の SP に対する好意度が高いことも示された。

すなわち、ビデオ映像から、評価者が SP を気質の違いによって区別していることを推測させるような印象形成データが得られた。特に、Z と S の SP に対しては、かなり正確な気質の印象が形成されたといつてよい。気質の印象評定に関し

ては、第 I 予備実験のビデオデータと、楨田・櫃田 (1971) の写真データは、ほとんど同じ傾向を示した。

また、第 I 予備実験では、データは割愛するが、SP の性・年齢条件も、印象形成にかなりの影響を及ぼすことがわかった。中年男性は E っぽく、また頭がよくみられる傾向があった。青年男性は S っぽく、暗く、あまり健康的でなくみられる傾向があった。青年女性は Z っぽく、また H っぽくみられる傾向があった。

映像の色の有無の条件に関しては、白黒映像でやや印象が暗くなる傾向がみられたが、その差はごく小さなものであった。

また、評価者の性差は、データにほとんど影響を及ぼさないようであった。

以上、第 I 予備実験では、ビデオ映像を用いた印象形成実験を行って、評価者が SP のパーソナリティ（特に、気質）を区別できる可能性が示唆された。しかし同時に、SP の性・年齢要因も認知に影響を及ぼすことがわかった。

2. 感度実験

——評価者の感度の問題の検討——

第 I 予備実験では、評価者側の条件として、評価者の性別、映像の色の有無（カラー映像か白黒映像か）の 2 つを取り上げたが、それらの条件では、評定データに有意な差はほとんど見いだされなかった。感度実験では、同じ第 I 予備実験のデ

ータに評価者の気質データを加えて、評価者の気質の違いが SP の気質の評価にどのように影響するのか確認し、評価者の特性と印象データとの間の一般的な関連性についても一度検討しておこうと考えた。要するに、Allport (1961) の言うところの、「よい評価者の資格」の中の、評価者と SP の類似性と感度の問題である。

先に述べた楨田・櫃田 (1971) の顔写真を用いた印象形成実験でも、評価者の気質が調べられ、同様の検討が行われている。そこでは、評価者と SP の気質が一致する場合に、気質認知の成績が一番良いことが明らかにされている。

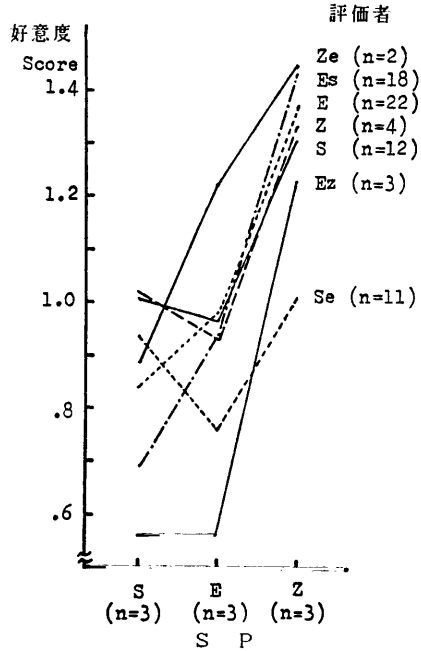
分析方法は以下の通りである。第 I 予備実験の評価者全員に対して、実験終了時に SCT を配布し、書いて提出するようもとめた。72 名が SCT を提出し、彼らを感度実験の評価者とした。提出された SCT の内容や筆跡をもとに、著者ともう 1 名の大学院生とで評価者の気質 (S-Z-E) を診断した。評価者の気質は以下のように分類された。

S: 12名 Se: 11名 Es: 18名
E: 22名 Ez: 3名 Ze: 2名
Z: 4名

感度実験では、まず、SP の気質別の、評価データの群間の比較を行ってみた。得点の一般的傾向は、評価者の数が 100 名から 72 名に減っても、図表 6-2 と同様であった。

次に、好意度と Z-S-E 各得点に関する、評価者の気質グループごとの評定平均値を比較してみた。図表 6-3 は、評価者の気質別の好意度得点を図示したものである。図を見ると、S 系あるいは Z 系の評価者では、S に対する好意度がやや高まっているようにも見えるが、統計的には評価者の気質は好意度に大きな影響を及ぼしてはいない。Z-S-E 各得点に関しては、さらにはっきりと、無関係な傾向が一致してみられた。

第 I 予備実験と感度実験において明らかになったことは、評価者の要因は、SP の要因よりも影響力が弱いということである。従って、以降の実験においては、評価者の要因については原則的に検討せず、一般的な対人認知・IPT の枠組みや次元性、SP の類型化などの問題に焦点をあてて、検討を進めていくことにした。



図表 6-3. 感度実験の好意度得点

[分散分析結果]
S P 要因: $P < 0.05$
評価者要因: $P > 0.05$
交互作用: $P > 0.05$

3. 第 II 予備実験

—チェックリスト (1) の作成—

ここでは、評価者が持った SP の印象を捉えるための道具を作り上げるという課題に取り組むことにした。第 3 章でも述べたように、当研究では、評価項目を並べたチェックリスト法を採用することにしたが、恣意的な項目の選択を避けるために、評価者の自由記述を整理して評価項目を決定し、独自のチェックリストを作成することにした。また、性格認知という比較的狭い領域の印象を取り扱うのではなく、外観の印象までも含めた包括的な印象を取り扱うこととした。

印象の自由記述を評価者に求めるために用いられた刺激は、第 5 章で述べた、第 II 予備実験用の SP500~SP509 のビデオ映像である。

評価者には SP の印象を、外観の印象 (体型・行動・表情などの印象) と、内面の印象 (能力・

性格・心の安定性などの印象)に分けて、簡条書きしてもらうことにした。そこで、左右に分けて罫線を引いた、B4版の紙を用意し、左に外観の印象を、右に内面の印象を書いてもらうようにした。

評価者は、学部学生 16 名 (M=6; F=10)、大学講師・大学院生 9 名 (M=8, F=1)、合計 25 名である。この 25 名はいずれも心理学を専攻しており、パーソナリティ理論についても多かれ少なかれ知識を持っていたが、SP とはまったく面識がなかった。

評価の方法は、原則的には、第 I 予備実験と同様である。評価者には、色合わせをした 14 インチのカラーテレビモニターの前に座ってもらった。はじめに、練習用 SP である SP500 の音声入りの映像を 2.5 分間見もらった。2.5 分の映像が終わったら、再び 2.5 分の同一の映像が繰り返される間に、評価用紙を使って印象の自由記述をするよう頼んだ。全員の SP500 に対する評価が終了したら、5 分間の「General view」の映像を見もらった。その後、SP501 から SP509 まで、順に、SP500 と同じ手続きで印象の自由記述をしてもらった。

25 名の評価者から得られた自由記述の数は、外観・内面の印象をあわせて、合計 2551 であった。外観と内面のカテゴリー分けは各評価者の主観に任せたので、集った自由記述の内容は相互にかなり重複していた。そこで、データ分析においては、外観と内面の印象を分けずに集計するこ

とにした。

まず、2551 の簡条書きを読んで、その内容を SP の特徴を記述した特徴項目に分解した。簡条書きの内容はほとんどそのまま 1 個の特徴項目を表していたが、中には、「明るく、ほがらか」のように、2 つの特徴項目に分けられる簡条書きもあった。また、評価者の中には、同一の簡条書きを何度も書いているケースも見られた。こうした場合には、簡条書きを 1 つだけ残して、あとは無効解答とした。このようにして整理すると、収集された特徴項目数は 2496 となった。

この 2496 項目を 3 段階の内容分析にかけて、最終的には 65 項目のチェックリスト (1) を作成した。内容分析には、KJ 法 (川喜田, 1967, 1970) を用いた。以下はその過程である。

まず、簡単な用語の統一を行った。これを第 1 次内容分析ということにする。たとえば、「大きい-でかい」「明るい-明るそう」「暗い-表情が暗い」などの類似した意味を持つ言葉群は、「大きい」「明るい」「暗い」などといった代表的な言葉に統合した。その結果、特徴を表す言葉は 952 語となった (もちろん項目の出現頻度は 2496 のままである)。

次に、学部学生 10 名の協力を得て、この 952 項目を 360 項目にまとめた。第 2 次内容分析である。さらに、この 360 語を第 3 次内容分析にかけて、最終的に、チェックリストを構成する特徴語を選んだ。評価者の労力や因子分析にかける場合のことを考えると、項目数はあまり多くすること

図表 6-4. 第 II 予備実験 第 2 次内容分析 大項目別集計結果

カテゴリー	トータル	%	気 質			性・年 齢		
			S	Z	E	MM	YM	YF
身 体	397	15.9	135	130	132	124	130	143
行 動・表 情	617	24.7	218	197	202	172	200	245
性 格	712	28.5	271	218	223	255	247	210
性 格・S	185	7.4	109	29	47	61	82	42
性 格・Z	104	4.2	12	66	26	39	22	43
性 格・E	229	9.2	73	81	75	99	54	76
生 活	230	9.2	60	82	88	97	76	57
能 力	153	6.1	54	50	49	73	43	37
評 価	124	5.0	45	32	47	35	51	38
SP500 への反応	263	10.5						
トータル	2496							

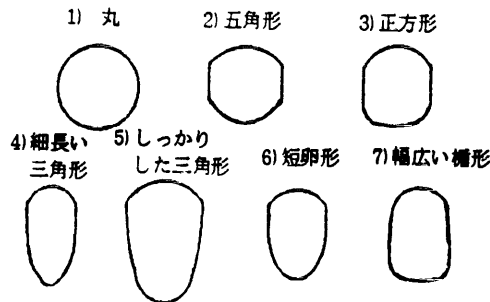
図表 6-5. チェックリスト (1) の 65 項目

カテゴリー	No.	項 目	カテゴリー	No.	項 目
身 体	1	目鼻だちがはっきりしている	行動・表情	32	力強い
身 体	2	アゴの発達がいい	行動・表情	33	活動的
身 体	3	首が長い	性 格	34	大ざっぱ
身 体	4	首が太い	行動・表情	35	おっとりしている
身 体	5	顔が大きい	行動・表情	36	社交的
身 体	6	顔が長い	性 格	37	お人好し
身 体	7	胸が厚い	性 格	38	好奇心が強い
身 体	8	背が高い	性 格	39	のんき
身 体	9	太っている	性 格	40	まじめ
身 体	10	身体つきがふっくらしている	性 格	41	頭がかたい
身 体	11	体型がきゃしゃ	行動・表情	42	エネルギー
身 体	12	体型ががっしりしている	性 格	43	大胆
身 体	13	声大きい	性 格	44	常識的
身 体	14	声が高い	行動・表情	45	運動が好き
身 体	15	健康的	性 格	46	平凡
行動・表情	16	姿勢がいい	性 格	47	根気がない
身 体	17	体力がない	性 格	48	内向的
身 体	18	幼い	性 格	49	慎重
身 体	19	老けている	性 格	50	冷たい
行動・表情	20	明るい	性 格	51	繊細
行動・表情	21	緊張している	性 格	52	引っ込み思案
行動・表情	22	礼儀正しい	性 格	53	せっかち
行動・表情	23	気取っている	性 格	54	見栄っぱり
行動・表情	24	感情が顔に出る	性 格	55	自分勝手
行動・表情	25	愛想がいい	行動・表情	56	えらそう
行動・表情	26	印象が鋭い	性 格	57	甘えんぼう
行動・表情	27	ポーッとしている	性 格	58	勝負気
行動・表情	28	表情が豊か	性 格	59	涙もろい
行動・表情	29	生き生きしている	性 格	60	好き嫌いが激しい
行動・表情	30	動作がゆっくりしている	性 格	61	神経質
行動・表情	31	落ち着きがない	性 格	62	自分に自信がない

63 知的能力 7段階評価 (低い—普通—高い)

64 好意度 7段階評価 (嫌い—普通—好き)

65 顔の形



ができない。ここでは、KJ 法だけでなく、項目ごとの頻度を数えたり、楨田・櫃田 (1971) のチェックリスト項目なども参考にした。

図表 6-4 に、第 2 次内容分析によって整理された 6 つの大項目ごとの項目頻度を示す。ここでは、練習用 SP (SP500) への反応を除く 2233 項目を、大項目別に集計してある。これを見ると、「身体」「行動・表情」「性格」という 3 つの大項目に含まれる特徴が、特徴全体の 70% 以上を占めていることがわかる。残りは、「能力」「評価」に関する特徴が 5% 程度ずつ。そして、仕事、趣味、家庭、生活歴といった「生活」に関する印象が 10% 程度である。

また、図表 6-4 にあるように、性格項目を、Z の気質を説明しているもの、S の気質を説明しているもの、E の気質を説明しているもの、その他のものに便宜的に分けて、気質条件、性・年齢条件の各カテゴリーごとに頻度をとってみると、第 I 予備実験と同様の傾向が見られた。すなわち、S の気質を説明している項目は S の SP の印象を語る時に使われやすく、Z の気質を説明している項目は Z の SP の印象を語る時に使われやすいが、E の SP に関してはそうした傾向がはっきりとはみられないようであった。同様に、S の項目は YM の SP を語るときに、Z の項目は YF の SP を語るときに、E の項目は MM の SP を語る時に使われやすいようであった。

次に、3 度の内容分析を経て作成されたチェックリスト (1) を構成する 65 項目について述べる。図表 6-5 の 65 項目である。項目の選定にあたっては KJ 法と頻度分析を併用したが、SP の外観・内面のできるだけ広い領域をカバーするように留意した。具体的には、65 項目のうち 62 項目は、図表 6-4 で頻度の高かった「身体」「行動・表情」「性格」という 3 つの大項目の中から選んだ。なお、これらの 62 項目が、身体、行動・表情、性格のうちいずれの大項目 (カテゴリー) に属するかという最終決定は、原則的に、学部学生 20 名の多数決に従っている。さらに、残りの大項目のうち、「能力」と「評価」に関しては、知的能力と好意度という項目を用意した。

また、Kretschmer (1955) を参考に、7 種類の顔の形をイラストにして、その中から SP の顔を選ばせることとした。もともと、Kretschmer (1955) は、顔正面の顔面輪郭として、S の短卵形、Z の平らな五角形、幅広い楕形、E の傾斜の急な卵形 (しっかりした長頭) をあげている。これに、日常よくいわれる、丸形、四角い顔、やせて細長い顔の 3 つを加えて、ここでは 7 種類の顔のイラストを用意した。

以上の手続きで、本実験への準備が終了した。準備された SP とチェックリストを用いて、第 1 実験以降の本格的な対人認知の基礎的研究に着手することにした。

7

第1実験 (ビデオ実験・写真实験)

1. 目的	33
2. 方法	33
3. 結果・考察	35

1. 目 的

第1実験では、多数の SP を用意し、チェックリスト (1) を用いて、対人認知に関する基礎的研究を行った。ここでは、間接的な対人認知刺激としてのビデオ映像の有効性の検討、予備的な対人認知の次元性の検討、チェックリスト (1) の項目の整理、項目の有効性の検討などを行った。データは、各特徴項目への評定平均値と、項目間の相関係数を用いた主成分分析結果などである。

特に、ビデオ映像の有効性に関しては、ビデオ映像と写真とを刺激とした、なるべく同じ手続きの印象形成実験を行い、その結果の差異を検討することにした。そこで、以下、ビデオ映像を刺激とした実験(「ビデオ実験」あるいは「第1実験 (VIDEO)」)というのと、写真を刺激とした実験(「写真实験」あるいは「第1実験 (写真)」)というのとを、平行的に報告していくことにする。

2. 方 法

(1) 刺 激

【ビデオ実験】

第5章第1節で述べた SET 1 から SET 6 までの6巻のビデオテープを刺激として用いた。SP の数は、練習用 SP 1 名を加えて、55 名である。ただし、個々の評価者には、テープ1巻分の映像を見てもらったので、1 人の評価者が見る SP の数は、練習用 SP 1 名を含めて、10 名である。

【写真实験】

第5章第2節で述べた、25 名の SP の写真を刺激として用いた(練習用 SP を含む)。写真刺激は、SP01-SP08, SP09-SP16, SP17-SP24 の3セットに分け、原則的に、評価者ごとにいずれかのセットをランダムな提示順で見せた。従って、1 人の評価者が見る SP の数は、練習用 SP 1 名を含めて、9 名である。

(2) 評価用紙

【ビデオ実験】

図表 6-5 にあげた 65 項目を並べた評価用紙を作成した。チェックリスト (1) である。これ

は、大きく分けると、身体項目（項目数 18）、行動・表情項目（項目数 20）、性格項目（項目数 24）、その他の項目（知的能力・好意度・顔の形の 3 項目）という 4 項目群からなっている。

チェックリスト (1) は、実際には、評価における順序効果を統制するために、項目配列の順序が異なる A 系列と B 系列の 2 種類を作った。どちらの場合も、はじめの方に身体項目を並べ、その後に行動・表情項目、性格項目を順に並べることを原則とした。その他の 3 項目は、最後に、知的能力、好意度、顔の形の順に並べた。従って、系列の違いは、原則として、それぞれの項目群内での配列の違いということになる。

項目に対する評価は、その他の 3 項目を除いて、4 段階評価とした。チェックリストに記された特徴に対して、「本当にそう思う」「ある程度そう思う」「どちらかといえばそう思う」「そう思わない」の 4 段階である。

その他の項目のうち、知的能力と好意度に関しては、よい評価から悪い評価までの 7 段階評価とした。顔の形は、7 つのイラストの中から SP の顔の輪郭を選ばせた。

評価者の行った評価を数値化して、raw data とした。図表 6-5 の 1 番 (v1) から 62 番 (v62) の項目では、「そう思わない」に ○ 印がついていた場合これを 0 点とした。同様に、「どちらかといえばそう思う」には 1 点、「ある程度そう思う」には 2 点、「本当にそう思う」には 3 点を与えた。

【写真实験】

写真实験でも、ビデオ実験とまったく同じ評価用紙を用いた。チェックリスト (1) の A 系列と B 系列である。

(3) 評価者

【ビデオ実験】

評価者数は、無効データを除いて、各 SP あたり 42～52 名、のべ 2654 名の男女大学生、研修生である。彼らは、ある程度心理学を習ってはいるが、対人認知やパーソナリティに関する専門的な知識はない。年齢は、18～20 歳代が中心であるが、のべ 250 名ほど、40 歳前後の男性評価者が含まれている。

【写真实験】

評価者数は、無効データを除いて、各 SP あたり 34～46 名、のべ 1043 名の男女大学生である。彼らは、ある程度心理学を習ってはいるが、対人認知やパーソナリティに関する専門的な知識はない。年齢は、ほぼ 18～30 歳である。

(4) 手続き

【ビデオ実験】

実験手続きは、原則的には、第 II 予備実験と同様である。複数の評価者に、チェックリスト (1) を配り、練習用 SP である SP500 の印象評定をするよう求めた。評価者全員の SP500 に対する評価が終了したら、5 分間の「General View」の映像を見てもらった。その後、各評価者ごとに、1 セットの SP 9 名について、SP500 の場合と同じ手続きで印象評定をするよう求めた。

刺激の提示順は、SP 番号順に提示するグループと、途中から提示するグループと、2 通りを作った。また、評価項目の順序効果と評価者の性別も統制して、データをとった。

【写真实験】

写真实験では、各評価者に、原則として、練習用 SP を含めて 9 名の SP の評価を求めることにした。集まった複数の評価者にチェックリスト (1) を配り、簡単なインストラクションをしたあと、はじめに練習用 SP である SP00 を見せた。写真を見て、SP の印象が安定したら、チェックリスト (1) を使って印象評定するよう求めた。全員の SP00 に対する評価が終了したら、ビデオ実験の「General View」のかわりに、これから評価してもらう 8 人の SP の写真を全部見てもらった。

その後、8 枚の写真刺激をまん中におき、評価者が適当にその山から 1 枚ずつ写真刺激を取り出して見ることにして、SP00 と同じ手続きで印象評定をするよう求めた。こうして、刺激の提示順を評価者ごとに異ならせ、結果的にランダムな提示順に近くなるようにした。また、ここでも、評価項目の順序効果と評価者の性別を統制して、データをとった。

3. 結果・考察

(1) 項目評定平均値の検討

チェックリスト (1) の 65 項目に対する評価を数値化して、raw data とした。ここでは、それらの raw data をいろいろな条件でまとめた評定平均値について検討していくことにする。

1) 身体、行動・表情、性格各項目の有効性

まず、項目ごとに、SP×評価者のデータを分散分析にかけて、SP の 2 条件 (気質、性・年齢) とそれに効いている項目との関連を統計的に検討してみることにした。ここでは、2 種類の分散分析を行った。第1は、SP の 1 人 1 人を水準として、評価者を繰り返しとする、SP を要因とした一元配置の分散分析である。第2は、SP の気質条件と性・年齢条件を要因として、評価者を繰り返しとする、2 要因の分散分析である。計算結果はかなりの数字の羅列になるので、ここでは割愛するが、同様の計算をした第3実験の 33 項目の場合のデータが図表 9-1 に載せられている。

さらに、計算された項目別の平均平方 (MS) や

F 値 (F) を、身体、行動・表情、性格という大項目ごとにまとめて、その平均値とメディアンを算出した集計結果が、図表 7-1 (ビデオ実験) と図表 7-2 (写真实験) に示してある。F 分布を考えると、平均値よりもメディアンを選んだ方がよいようにも思われるが、これを見ると、ビデオ実験でも写真实験でも、原則的には、ほぼ同様の傾向がみられたといつてよい。

まず、一元配置分散分析の集計結果を見ると、メディアンでも平均値でも、級内 MS が身体<行動・表情<性格となっている。これは、同一 SP 内での評定誤差の大きさが身体<行動・表情<性格となっていることを意味している。逆に、F 値は身体>行動・表情>性格となっている。これは、SP 間の評定誤差が身体項目で一番大きく、性格項目で相対的に小さいことを物語っている。すなわち、ある特定の SP を評価する場合には、身体の評価で誤差が一番少なく、性格の評価で誤差が一番大きくなりやすい。また、複数の SP の印象を比べると、身体の評価が一番印象がはっきりと区別され、性格の評価で印象が相対的に区別されにくい。要するに、身体の影響が一番一致し

図表 7-1. 第1実験 (VIDEO) 分散分析集計結果

要因自由度	一元配置分散分析				二元配置分散分析		
	級内MS	SP No.	残差MS	気質	性・年齢	交互作用	
		df=53,2600		F	df=2,2645	df=2,2645	df=4,2645
身体(18項目)	平均	0.654	29.524	0.811	196.568	83.589	11.943
	メディアン	0.649	24.415	0.798	166.635	48.020	12.950
行動・表情(20)	平均	0.699	18.831	0.821	79.986	72.241	26.302
	メディアン	0.703	17.535	0.811	46.410	57.090	21.260
性格(24)	平均	0.732	11.655	0.804	44.151	71.778	12.140
	メディアン	0.730	11.110	0.804	33.810	59.340	9.820

図表 7-2. 第1実験 (写真) 分散分析集計結果

要因自由度	一元配置分散分析			二元配置分散分析			
	級内MS	SP No.	残差MS	気質	性・年齢	交互作用	
		df=23,1019		F	df=2,1037	df=1,1037	df=2,1037
身体(18項目)	平均	0.760	33.369	0.928	144.851	41.024	12.792
	メディアン	0.775	28.490	0.905	74.145	19.150	13.670
行動・表情(20)	平均	0.838	16.263	1.027	25.967	13.365	14.477
	メディアン	0.808	16.780	1.047	19.830	10.955	12.260
性格(24)	平均	0.893	8.173	0.981	17.346	10.865	7.417
	メディアン	0.908	8.490	0.968	11.560	6.180	6.870

やすく、性格の印象は相対的に人さまざま、ということになる。これは、我々が臨床診断やその訓練の際に感じる印象と一致する。そうした場面でも、身体や行動の印象は評価者間で大きく食い違うことは少ないが、性格の印象になると大幅な食い違いが生じてしまうことがよくある。

しかし、こうした違いはあくまでも相対的なものである。算出された性格項目群の F 値はかなり大きな値を示している。そうした意味では、図表 7-1, 7-2 のデータは、SP の印象が評価者によってある程度異なる側面のあることを示唆しているが、同時に、誰もが SP をある程度一致して判断している可能性を十分にうかがわせるデータとあってよいことを示している。

二元配置分散分析の集計結果を見ると、その内容をもう少し詳しく把握することができる。SP の気質要因を取り上げると、一元配置分散分析のケースと同様に、身体情報のウェイトが高い。一方、性・年齢の差を印象評定によって捉えようとする時には、ビデオ実験では、「幼い」のようにまさにぴったりの項目を除けば、いろいろなカテゴリーの項目を同じようなウェイトで使っているように見える。一方、写真実験では、どちらの要因においても身体項目のウェイトが高い傾向がみられる。後にもう一度、(3) のところで検討するが、こうした評価の違いがビデオ映像と写真との違いを物語るデータの 1 つになるようである。おそらく、写真では、行動が観察できない分、行動・表情以下の評価にばらつきが出やすいのであろう。

2) 知的能力, 好意度, 顔の形と他の項目との関連性

すでに述べたように、チェックリスト (1) では、能力と評価については、1 項目ずつ、「v63 知的能力」と「v64 好意度」のみを項目として設けた。ここでは、それに「v65 顔の形」を加えた 3 項目と他項目との関連性について報告したい。

まず、知的能力の評定平均値と他項目の評定結果との関連について述べる。写真実験で身体項目の評定平均値が高いことがやや目だったが、それを除くと、どちらの実験結果もほぼ同じような傾向を示しているといつてよい。知的能力が低く評価

されたケースでは、同時に、大ざっぱ、自分勝手、甘えんぼう、根気がない、のんき、がっしり、ふっくらといった項目の評定平均値が高かった。知的能力が普通と評価されたケースでは健康的、明るい、お人好しといった項目の評定平均値が高かった。知的能力が高いと評価されたケースでは、慎重、神経質、繊細、好奇心が強い、目鼻だちがはっきりしているといった項目の評定平均値が高かった。

次に、好意度の評定平均値と他項目の評定結果との関連について述べる。写真実験ではやや身体項目の出現頻度が高いことを除いては、やはり、どちらの実験もほぼ同じような傾向を示しているといつてよい。嫌いと評価されたケースでは、同時に、神経質、好き嫌いが激しい、自分勝手、頭が硬い、顔が大きいなどといった項目の評定平均値が高かった。好きと評価されたケースでは、明るい、礼儀正しい、健康的、愛想がいい、生き生きしているといった項目の評定平均値が高かった。

もう一つ興味深いのは、知的能力や好意度の評価が高くなるに従って、まじめ、常識的といった項目の評定平均値が高くなっていくことである。こうした項目は、いわゆる「社会的望ましさ」を物語る項目であり、やはり、能力、評価項目と、社会的望ましさを表現しているような行動・表情項目、性格項目との関連性は強いようである。

最後に、顔の形と、身体、行動・表情、性格各項目との関連性について報告する。

まず、SP の顔の形の印象と SP の気質条件との関係についてみてみよう。ここでもやはり、ビデオ実験と写真実験のデータはかなりよく似ていた。つまり、S の SP は細長い三角形、短卵形、五角形などと評価されやすく、Z の SP は丸形、幅広い楕形、五角形、短卵形などと評価されやすく、また、E の SP は短卵形、しっかりした三角形、五角形などと評価されやすいようだった。

次に、7 種類の顔の形ごとに、評定平均値の高い、行動・表情項目、性格項目を集計して示す。ここでも、ビデオ実験のデータと写真実験のデータはかなりよく似た傾向を示している。つまり、

- 1) 丸形のお人好し, 大ざっぱなど
- 2) 五角形の愛想がいいなど
- 3) 正方形の慎重, 力強いなど
- 4) 細長い三角形の繊細, 内向性など
- 5) しっかりした三角形の運動が好きなど
- 7) 幅広い楕形の力強い, お人好しなど

である。これは、Kretschmer-Sheldon の体格と気質の関係に近いような、身体印象と性格印象との関連性を示すデータである。6) 短卵形の評価を除くと、一般の人々の IPT の中にもそうした関連性が共通に存在している可能性が示唆される。

しかしデータの中には、Kretschmer-Sheldon の実際の体格と気質の関係とは食い違いをみせる項目間の関連性もみられる。たとえば、がっしり、ふっくらしているようにみえる人は知的能力が低く評価される、Z は知的能力が低く評価される、やせて、鼻筋が通ってみえる人は知的能力が高く評価される、ふっくらしている人はがっしりしているようにも見える(逆は真ならず)、といった内容である。このような IPT の内容は、横田・櫃田(1971)、大橋ら(1976)でも報告されている。

(2) 多変量解析データの検討

次に、v1~v62 の 62 項目を変数、SP×評価者を繰り返して、積率相関係数を計算した。計算された項目間の相関係数行列を主成分分析にかけ、主成分を抽出し、項目の主成分負荷量と SP (×評価者) の主成分得点を算出した。以下、主成分分析データをもとに、いくつかの課題について検討していくことにする。

1) 次元性

主成分分析の固有値の推移を見てみると、どちらの実験でも、6 主成分あるいは 10 主成分のところで落差があった。次元性のあたりづけの意味から主成分数を少し多くとりたかったこともあり、固有値が 1 に近い 10 主成分までとることにした。そして、得られた 10 主成分の負荷量行列をバリマックス回転にかけた。

ここで得られた 10 主成分の推定結果を図表 7-3 (ビデオ実験) と図表 7-4 (写真实験) に示す。両図とも、主成分欄の % 付きの数字は、各

主成分の寄与率を示している。また、項目欄の小数は、項目ごとの負荷量を示している。なおここでは、寄与率は、各主成分の固有値を 62 主成分の固有値の総和で割ったもので示してある。

両者の主成分の推定結果を比較すると、第 6 主成分まで、ほとんど同一の内容を示していた。さらに、ビデオ実験の第 7 主成分と写真实験の第 9 主成分も同じ内容と考えてよいから、10 個の主成分のうち 7 個まで、ほとんど同一内容の主成分が抽出されたといつてよい。

第 1 主成分は、明るさ、活動性に、力強さの加わった、対人認知でいう「力本性」のような次元と考えられた。

第 2・第 6 主成分は身体に関する次元で、体の縦横の大きさや力強さをつかんでいるようだった。気取りや見栄に関して説明するような第 3 主成分、また、鋭さや勝気さの反対にある、おっとりさ、のんきさのようなものを説明するような第 4 主成分は、ヒステリー性格(H)の一部の要素を捉えているようにも思われた。

第 5 主成分は、まじめさと、礼儀正しさが一緒になった因子と推定された。

また、ビデオ実験の第 7 主成分と写真实験の第 9 主成分は、不健康さ、体力のなさ、老けた印象を説明しているようであった。

項目の内容がまだ未整理の段階で、断定的なことはいえないが、これら 7 主成分の寄与率を合計すると、ビデオ実験でも写真实験でも、85% 程度とかなり高い値になった。また、内容も、先立つ性格認知研究の次元に比べて、SP のかなり広い領域の特徴をカバーしているように思われた。

2) SP の類型化

次に、SP ごとに主成分得点を算出し、SP の類型化に関して、予備的な検討を行ってみた。実際には、ここでは、主成分得点は SP×評価者ごとに算出されることになるので、評価者をならして、SP ごとの主成分得点の平均値をデータとして用いることにした。

まず、10 主成分の中から 2 主成分ずつを取り出し、その 2 次元の中での SP の布置を図示してみた。その結果、ビデオ実験の第 1 主成分と第

図表 7-3. 第1実験 (VIDEO) 10 主成分の推定結果

主成分	主成分の推定結果	負荷量+の項目	負荷量-の項目
I 24.6%	明るく 活動的 エネルギー 社交的 愛想がいい 運動を好む	.80 活動的 .79 明るい .77 生き生き .76 社交的 .74 表情が豊か .72 エネルギー .67 好奇心が強い .66 愛想がいい .65 運動が好き .61 大胆 .60 顔に出る .56 健康的 .53 声大きい	-.47 内向的 -.37 引っ込み思案 -.29 体力がない
II 14.1%	体の幅が広い がっしり ふっくら 力強い	.80 胸が厚い .80 首が太い .78 太っている .77 がっしり .73 ふっくら .66 顔が大きい .61 力強い	-.48 きゃしゃ -.31 首が長い -.25 体力がない
III 14.0%	見栄っぱり 気取っている 「H」 冷たい 好き嫌いが激しい	.76 自分勝手 .74 見栄っぱり .70 えらそう .70 冷たい .70 気取っている .68 好き嫌い激しい .53 頭が硬い	-.37 お人好し -.21 涙もろい -.19 おっとり
IV 12.6%	おっとり・ゆっくり ポーッとしている のんき 甘えんぼう	.69 のんき .68 おっとり .64 甘えんぼう .60 幼い .58 ポーッとしてる .53 ゆっくり .51 平凡	-.23 鋭い -.20 エネル ギッシュ -.18 勝気
V 10.0%	こつこつとまじめ 礼儀正しい	.80 まじめ .74 慎重 .74 常識的 .61 礼儀正しい .53 繊細	-.40 根気がない -.36 大きっぱ -.30 落着きがない
VI 6.8%	背が高く細い	.80 背が高い .70 顔が長い .67 首が長い	-.35 ふっくら -.31 太っている
VII 4.8%	老けてみえる 体力がない	.61 老けている .34 体力がない	-.35 健康的 -.25 幼い
VIII 4.5%	緊張が高い 内気で引っ込み思案	.61 緊張している .36 引っ込み思案 .32 神経質	-.21 えらそう -.18 愛想がいい -.18 社交的
IX 4.4%	姿勢がいい 礼儀正しい	.60 姿勢がいい .40 礼儀正しい .38 目鼻立ち	-.44 落着きがない -.21 自信がない -.19 体力がない
X 4.1%	声が高い きゃしゃで繊細	.52 声が高い .35 繊細 .34 きゃしゃ	-.37 平凡 -.20 健康的

図表 7-4. 第1実験 (写真) 10 主成分の推定結果

主成分	主成分の推定結果	負荷量+の項目	負荷量-の項目
I 25.7%	明るく 活動的 社交的 愛想がいい エネルギッシュ 運動を好む	.84 活動的 .83 明るい .81 社交的 .80 生き生き .78 表情が豊か .75 エネルギッシュ .73 運動が好き .72 愛想がいい .69 好奇心が強い .61 健康的 .58 大胆	-.59 内向的 -.50 引っ込み思案 -.42 自信がない -.41 ポーッと -.36 冷たい -.36 体力がない
II 17.2%	体の幅が広い がっしり ふっくら 力強い	.85 胸が厚い .85 がっしり .84 太っている .83 ふっくら .73 顔が大きい .71 力強い .54 声大きい	-.60 きゃしゃ -.42 首が長い -.27 声が高い -.26 体力がない
III 12.5%	自分勝手 えらそう 見栄っぱり 勝気 「H」	.75 自分勝手 .70 えらそう .69 好き嫌い激しい .66 見栄っぱり .65 冷たい .63 勝気 .51 気取っている	-.32 お人好し -.31 愛想がいい
IV 11.8%	幼く甘えんぼう おっとり・ゆっくり ポーッとしている のんき	.70 甘えんぼう .67 おっとり .67 幼い .61 ゆっくり .61 のんき .56 ポーッとしてる .55 涙もろい	-.16 運動が好き -.15 エネル ギッシュ
V 10.9%	こつこつとまじめ 礼儀正しい	.77 まじめ .76 慎重 .73 常識的 .70 礼儀正しい .53 繊細	-.38 大ざっぱ -.34 着落きがない
VI 6.7%	背が高くて細い	.73 背が高い .66 顔が長い .62 首が長い .52 目鼻たち .52 アゴが発達	-.28 ふっくら -.26 太っている
VII 4.5%	せっかち 落ち着きがない	.57 せっかち .48 落ち着きない	-.18 のんき -.16 ゆっくり
VIII 3.9%	平凡でのんき	.64 平凡 .34 のんき	-.36 鋭い -.32 目鼻たち -.28 繊細
IX 3.7%	老けてみえる 体力がない	.62 老けている .43 体力がない	-.35 健康的 -.26 緊張
X 3.1%	気取っている	.58 気取っている .40 見栄っぱり	-.19 背が高い -.16 声大きい

2 主成分を軸とした図では、概略、気質条件で、SP が類型化されている様子がみてとれた。しかし、写真実験では、きれいな SP の類型化を示す図はみられなかった。

また、両実験の第 3・第 4 主成分は、負荷量を用いた推定結果からは H の程度を説明する主成分と考えられたが、主成分得点を用いた SP の散布図から推定すると、むしろ、性・年齢条件を説明する主成分と考えた方がよいようであった。しかし、ビデオ実験では、第 3・第 4 主成分の主成分得点を用いて、SP の H の強さをある程度説明できることもわかった。

(3) 刺激としての、ビデオ映像と写真の比較

第 1 実験では、ビデオ実験と写真実験をほとんど同じ手続きで行った。そして、結果をみると、項目評定平均値も、多変量解析データも、ほとんど同一の傾向を示していた。

両者の実験結果のかなりの一致は、中里ら(1976)の主張するように、「言語的要因の介在」を示唆しているようにも思える。つまり、評価者は SP の特徴を評価していたというより、チェックリストの特徴項目の類似性を評価していたかもしれないわけである。ビデオ実験と写真実験は同一のチェックリストを使用しており、もし評価者がこうした評価を行っていたのであれば、自ずから、データはかなりの一致を示すはずである。

第 1 実験でそうした「言語的要因の介在」が多少なりともあったことを否定することはできない。しかし、2 つの実験のデータを詳細にみていくと、そこに、ビデオ実験と写真実験の違いがあらわれてくることも確かである。

はじめに、図表 7-1、7-2 の分散分析の集計結果をみてみよう。自由度が違うので、2 つの実験の数値を直接比較することはできないが、まず、同一 SP 内での評定誤差を示す一元配置の級内 MS をみてみると、3 つの大項目すべてで、写真実験の方が大きな値を示している。二元配置の残差 MS も同様である。これは、ビデオ映像の方が、写真よりも、印象の一致度が高いことを示している。次に、F 値の大項目ごとの比をみてみよう。身体：行動・表情：性格の比を、要因ごと

に計算するわけである。これをみると、写真実験では、明らかに、行動・表情項目、性格項目の F 値が、身体項目に比べて大幅に小さくなっていることがわかる。これは、写真実験では、SP の行動・表情、性格の印象の一致率が低いことを物語っている。ビデオ映像は写真に比べて情報量がかなり多く、それが、SP の属性を評価する際の、あいまいさ、不確定さを少なくする要因となっているように思われる。また、写真に比べて、相对

図表 7-5. チェックリスト(2)の 40 項目

カテゴリー	No.	項 目
身 体	1	背が高い
身 体	2	首が太い
身 体	3	アゴが発達している
身 体	4	なで肩
身 体	5	首が長い
身 体	6	がっしりしている
身 体	7	中肉中背
身 体	8	体型が丸い
身 体	9	きゃしゃ
行動・表情	10	エネルギー
行動・表情	11	力強い
身 体	12	健康的
行動・表情	13	運動が好き
性 格	14	大 胆
性 格	15	しつこい
行動・表情	16	礼儀正しい
行動・表情	17	姿勢がいい
身 体	18	老けている
身 体	19	声が大きい
行動・表情	20	活 動 的
行動・表情	21	身振り・手振りが大きい
行動・表情	22	表情が豊か
行動・表情	23	おっとりしている
性 格	24	お人好し
性 格	25	あたたかい
行動・表情	26	だらしない
性 格	27	内 向 的
行動・表情	28	もの静か
身 体	29	体力がない
性 格	30	引っ込み思案
行動・表情	31	ボーッとしている
性 格	32	冷 たい
性 格	33	見栄っぱり
行動・表情	34	気取っている
行動・表情	35	意識している
行動・表情	36	愛想がいい
身 体	37	幼 い
行動・表情	38	うるさい
性 格	39	神 経 質
行動・表情	40	緊張している

的に、行動・表情、性格といった、内面的な SP の印象を捉えることの容易な刺激であることを物語って思われる。

また、写真实験の SP が少なく明確な結論は出せないが、ビデオ実験の方が、写真实験より、SP の H の程度をうまく説明できそうなことを物語るデータも得られている。

以上、対人認知実験の刺激として、ビデオ映像と写真を用いた場合の差異について論じた。両者を比較すると、ビデオ映像の方が、いくぶんか、SP のより広い側面の印象を捉えやすい道具であることが明らかとなったといつてよい。

（4）チェックリスト（2）の作成

第2実験以降、さらに詳細な次元性の検討を行うために、これまでのデータをもとに、チェックリスト項目の整理を行った。

どちらの実験でも、要因別の評定平均値がうまく分かれていない項目や主成分分析のコミュニティの値が低い（0.55 以下）項目は原則的に削除・統合の対象とした。

また、チェックリスト（1）には載せられていないが、第1実験の主成分分析結果、第1実験の評価者の感想、先立つ性格認知研究結果などを考慮すると、新たに検討の要ありと思われた項目群を追加した。

さらに、能力、評価に関する項目は、これ以降のチェックリストには加えないことにした。ただし、これは、対人認知に能力、評価の次元が存在しないということではない。存在を前提として、一時棚上げし、身体、行動・表情、性格という、頻度の高い、大きな項目群に絞って研究をすすめていこうと考えたからである。

こうして決定されたチェックリスト（2）の40項目を図表7-5に示す。これらの項目は、身体、行動・表情、性格いずれかの項目（カテゴリー）に含まれる。それぞれの項目が、身体、行動・表情、性格のうち、どの大項目に該当するか、という決定は、チェックリスト（1）の場合と同様、原則的に、学部学生20名の多数決に従った。

8

第 2 実験

第 2 実験は過渡的な研究であり、対人認知の次元性に関しては、より詳細な分析が第 3 実験において行われるので、紙面の都合もあり、ここでは、その内容について簡単に触れるだけにとどめたい。

第 2 実験では、第 1 実験同様、Kretschmer-Sheldon の 3 類型と性・年齢でコントロールした SP のビデオ映像を刺激とし、第 1 実験の結果を検討して新たに作成したチェックリスト (2) (図表 7-5) を用いて印象評定実験を行った。そして、身体、行動・表情、性格という、頻度の高い特徴項目群に絞って、対人認知の次元性に関する分析を進めた。

具体的には、40 項目からなるチェックリスト (2) を用いて、延べ 1513 名の評価者 (各 SP あたり 27~39 名) に 45 名のビデオ映像の印象評定を行わせた (練習用 SP を加えて 46 名)。

使用したビデオ映像は、第 5 章第 1 節に述べた、SET 1 から SET 5 までのビデオテープ 5 巻である。ただし、すでに述べたように、SP647 はあらかじめ決めていた条件に気質が当てはまらないことが判明したので、SET 4 から除き、かわりに SP667 を入れてある。

他の手続きは、第 1 実験のビデオ実験のものをそのまま踏襲している。

データの分析にあたっては、まず、第 1 実験同様、どんな SP の要因を区別するのにどんな項目が効いているかを、分散分析を使って検討してみた。第 2 実験でも、気質の違いを区別しやすい項目としては身体項目が最も有効である点は変わらなかったが、第 1 実験と異なり、行動・表情項目と性格項目の間に有効性の違いはほとんどみられなかった。また、性・年齢に関しては、有効性に差がなかった。

次に、データを因子分析にかけて (主因子法を用いて抽出された因子のうち、固有値が 1 を越える 6 因子をバリマックス回転にかけた)、対人認知の次元性の問題、その次元性の枠組みの中での SP の類型化の問題などについて検討した。

ここでは、身体、行動・表情、性格認知因子として 6 因子が抽出された。得られた 6 因子の累積寄与率は 100% に近く、この 6 因子によってチェックリスト (2) の印象特徴のばらつきはほぼ説明しつくされているように思われた。

第 1 因子は、活動性と力強さを合わせた、いわゆる力本性の因子のようなものであった。

第2因子は、ヒステリー性格の中の、自己中心性や自己顕示欲を示す因子のように思われた。

第3因子は、おっとりさ、内向性、人のよさといった内容の因子であった。

第4因子は、肉づきのよさや、体力の因子。

第5因子は、姿勢のよさや、礼儀正しさを、だらしないさの因子。

第6因子は、背の高さや身体各部の細長さの因子であった。

このうち、第4因子と第6因子が身体認知の次元、残りの4因子が行動・表情、性格認知の次元と考えてよいようであった。また、第2実験で抽出された6つの因子は、第1実験のビデオ実験、写真実験で共通に抽出された主成分とかなり類似した内容のものであった。

さらに、SPごとに因子得点を算出し、SPの類型化を行ってみた。まず、2因子ずつをとりだしてSPの布置をみてみた。たとえば、第1因子と第4因子を軸とした図では、気質要因によってSPが類型化されているようにみえた。また、第2・第3因子を軸とした図では、SPが性・年齢や、H要因によって類型化されているように見えた。

こうした結果は、各因子が気質、性・年齢あるいはH要因そのものを表しているわけではないが、複数の因子を組み合わせるといくつかの要因が表現でき、それによって、ある程度SPの類型化が可能であることを物語っている。そこで、SPごとの6因子の因子得点を非階層クラスター分析(SAS FASTCLUSを使用)にかけて、基本6次元すべてを考慮に入れたSPの類型化を検討してみた。その結果、6次元の中で、45名のSPが概略Kretschmer-Sheldonの3類型と重なる3クラスターに分類されることが明らかとなった。

最後に、これまでのデータをもとに、再度、チェックリスト項目の整理を行った。最終的なチェックリストであるチェックリスト(3)を作成す

るための作業である。ここでも、評定平均値、分散分析結果、因子分析の回転後のコミュニティの値などを参考に、項目の削除・統合・追加を行い、身体項目(項目数10)、行動・表情項目(項目数15)、性格項目(項目数8)、という3項目群の33項目を選択し、チェックリスト(3)を作成した。図表8-1に、チェックリスト(3)の33項目を載せる。

図表 8-1. チェックリスト(3)の33項目

カテゴリー	No.	項 目
身 体	1	背が高い
身 体	2	首が太い
身 体	3	首が長い
身 体	4	がっしりしている
身 体	5	体型が丸い
身 体	6	やせている
身 体	7	きゃしゃ
身 体	8	健康的
身 体	9	声大きい
身 体	10	体力がない
行動・表情	11	活動的
行動・表情	12	よく動く
行動・表情	13	明るい
行動・表情	14	表情が豊か
行動・表情	15	エネルギッシュ
行動・表情	16	力強い
行動・表情	17	運動が好き
行動・表情	18	おっとりしている
行動・表情	19	もの静か
行動・表情	20	姿勢がいい
行動・表情	21	物腰がきちんとしている
行動・表情	22	落ち着いた
行動・表情	23	だらしない
行動・表情	24	気取っている
行動・表情	25	愛想がいい
性 格	26	大 胆
性 格	27	お人好し
性 格	28	あたたかい
性 格	29	内 向 的
性 格	30	引っ込み思案
性 格	31	冷 たい
性 格	32	見栄っぱり
性 格	33	神 経 質

第3実験

1. 目的・方法	45
2. 結果・考察	45

1. 目的・方法

第3実験は、第1実験のビデオ実験や第2実験と同様の手続きで実験を行い、それらの実験で得られた次元性やSPの類型化などの知見に関して最終的な検討を加えていくことを目的とした、確認実験である。

第2実験では、1つ1つの因子が気質、性・年齢あるいはH要因そのものを表しているわけではないが、複数の因子を組み合わせると前述の要因が表現でき、それによって、ある程度SPの類型化が可能であることが明らかとなった。

そこで、第3実験では、まず、次元性に関する成果について再確認を試みることにした。また、SPの類型化に関しても、同様の確認をすることにした。さらに、評価者はこうした認知の次元を通してSPの何をみているのか、SP選択の外的基準とした気質や性・年齢要因あるいはH要因以外にSPを類型化している要因があるかどうか、最終的なチェックを試みることにした。

第3実験でも、Kretschmer-Sheldonの3類型と性・年齢でコントロールした、46名のSP（練

習用を含む）のビデオ映像を刺激とした。使用したビデオ映像は、第5章第1節に述べたものうち、SET4を除く、SET1からSET6までのビデオテープ5巻である。SET6は、SP667を除いて、第2実験では用いられていない。

印象評定に使用された項目は、チェックリスト(3)（図表8-1）の33項目である。

評価者は、述べ2169名（各SPあたり44～55名）の男女大学生、研修生である。

他の手続きは、第1実験のビデオ実験、第2実験のものをそのまま踏襲している。

2. 結果・考察

(1) 項目評定平均値の検討

raw dataは、第1・第2実験と同様、項目×SP×評価者の形のデータである。

まず、項目ごとに、SP×評価者のデータを2種類の分散分析にかけて、SPの条件とそれに効いている項目との関連を統計的に検討してみることにした。第1は、SPの1人1人を水準として、評価者を繰り返しとする、SPを要因とした一元配置の分散分析である。第2は、SPの気質条件

図表 9-1. 第3実験 項目ごとの分散分析結果

カテゴリー	No.	項目	一元配置分散分析			二元配置分散分析						
			級内 MS	SP No. df =	P	残差 MS	気質 df =	P	性・年齢 df =	交互作用 df =	P	
身	1	背が高い	0.694	34.62	0.0001	0.912	91.94	0.0001	171.07	0.0001	22.13	0.0001
身	2	首が大きい	0.56	49.31	0.0001	0.804	379.01	0.0001	10.46	0.0001	13.35	0.0001
身	3	首が長い	0.695	27.97	0.0001	0.772	285.17	0.0001	76.25	0.0001	33.88	0.0001
身	4	がっしり	0.635	47.96	0.0001	0.888	395.64	0.0001	6.81	0.0011	15.75	0.0001
身	5	体型が丸い	0.435	85.5	0.0001	0.721	686.87	0.0001	81.16	0.0001	4.77	0.0008
身	6	やせている	0.69	49.9	0.0001	0.856	508.89	0.0001	59.02	0.0001	38.36	0.0001
身	7	きゃしゃ	0.694	25.31	0.0001	0.789	299.99	0.0001	5.87	0.0029	18.82	0.0001
身	8	健康的	0.702	24.43	0.0001	0.786	230.37	0.0001	91.85	0.0001	13.6	0.0001
身	9	声が大きいの	0.712	17.72	0.0001	0.857	62.54	0.0001	3.48	0.031	29.79	0.0001
身	10	体力がない	0.731	15.15	0.0001	0.805	146.63	0.0001	10.22	0.0001	15.31	0.0001
行動	11	活動的	0.762	17.07	0.0001	0.88	86.38	0.0001	29.19	0.0001	24.76	0.0001
行動	12	よく動く	0.909	7.57	0.0001	0.993	24.44	0.0001	1.11	0.3282	9.6	0.0001
行動	13	明るい	0.687	26.5	0.0001	0.797	145.2	0.0001	128.87	0.0001	32.26	0.0001
行動	14	表情が豊か	0.77	22.56	0.0001	0.9	94.71	0.0001	90.88	0.0001	33.81	0.0001
行動	15	エネルギッシュ	0.742	14.91	0.0001	0.833	101.42	0.0001	14.07	0.0001	20.65	0.0001
行動	16	力強い	0.68	17.17	0.0001	0.77	152.91	0.0001	0.7	0.4964	18.95	0.0001
行動	17	運動が好き	0.756	20.19	0.0001	0.928	72.29	0.0001	49.72	0.0001	12.59	0.0001
行動	18	おっとり	0.861	10.6	0.0001	0.971	19.13	0.0001	32.77	0.0001	8.08	0.0001
行動	19	もの静か	0.816	15.43	0.0001	0.926	90.94	0.0001	21.73	0.0001	21.46	0.0001
行動	20	姿勢がいい	0.828	16.39	0.0001	0.958	27.86	0.0001	120.35	0.0001	0.95	0.4364
行動	21	姿勢がきちんとして	0.721	16.71	0.0001	0.813	11.71	0.0001	174.04	0.0001	1.63	0.1634
行動	22	物腰がきちんとして	0.804	12.83	0.0001	0.898	10.4	0.0001	103.34	0.0001	5.0	0.0005
行動	23	落ち着いている	0.607	17.62	0.0001	0.663	5.12	0.006	237.33	0.0001	2.18	0.0685
行動	24	気取っている	0.828	9.43	0.0001	0.926	12.47	0.0001	32.95	0.0001	4.98	0.0005
行動	25	愛想がいい	0.773	22.4	0.0001	0.875	136.69	0.0001	98.31	0.0001	29.62	0.0001
性格	26	大胆	0.688	9.81	0.0001	0.755	26.77	0.0001	10.66	0.0001	23.14	0.0001
性格	27	お人好し	0.808	7.51	0.0001	0.355	47.6	0.0001	26.04	0.0001	2.96	0.0188
性格	28	あたたかい	0.727	13.55	0.0001	0.79	96.75	0.0001	62.09	0.0001	6.55	0.0001
性格	29	内向的	0.841	13.84	0.0001	0.938	92.7	0.0001	5.94	0.0027	22.82	0.0001
性格	30	引っ込み思案	0.735	11.48	0.0001	0.824	61.67	0.0001	1.83	0.1608	14.41	0.0001
性格	31	冷たい	0.626	11.43	0.0001	0.676	64.62	0.0001	65.0	0.0001	4.0	0.0031
性格	32	見栄っ張り	0.834	7.21	0.0001	0.892	6.8	0.0011	45.68	0.0001	4.8	0.0007
性格	33	神経質	0.826	18.23	0.0001	0.889	160.13	0.0001	97.53	0.0001	10.81	0.0001

図表 9-2. 第 3 実験 項目の分散分析集計結果

要因 自由度	一元配置分散分析			二元配置分散分析			
	級内 MS	SP No. 44,2124 F	残差 MS	気 質 2,2160 F	性・年齢 2,2160 F	交互作用 4,2160 F	
身 体(10項目)	平 均	0.665	37.787	0.819	300.705	51.619	20.576
	メディアン	0.694	31.295	0.805	292.580	34.740	17.285
行動・表情(15)	平 均	0.770	16.492	0.875	66.112	75.691	15.101
	メディアン	0.770	16.710	0.898	72.290	49.720	12.590
性 格(8)	平 均	0.761	11.633	0.827	69.630	39.346	11.186
	メディアン	0.772	11.455	0.835	63.145	35.860	8.680

と性・年齢条件を要因として、評価者を繰り返しとする、2 要因の分散分析である。図表 9-1 に分散分析結果を示す。一元配置の、級内 MS は級内平均平方のこと、F は F 値、P は F の確率である。同様に、二元配置の残差 MS というのは残差項の平均平方のことである。

ここでは、一部の例外を除き、ほとんどの項目評定平均値が、SP 要因、あるいは、気質、性・年齢要因で有意差を示している。特に、一元配置の SP 要因ではすべての項目で P は 0.0001 以下、二元配置の気質要因でも「v23 だらしない」の $p=0.006$ を除いて、0.0001 以下であった。

さらに、図表 9-1 の項目別の MS や F 値を、身体、行動・表情、性格項目別にまとめて、平均値とメディアンを算出した集計結果が、図表 9-2 にまとめてある。

まず、一元配置分散分析の集計結果を見ると、メディアンでは、級内 MS は、身体<行動・表情=性格となっている。これは、同一 SP 内での評定誤差が身体項目で小さいことを意味している。また、F 値は身体>行動・表情>性格となっている。これは、SP 間の評定誤差が身体項目で一番大きく、性格項目で相対的に小さいことを物語っている。要するに、身体的印象は一致しやすく、行動・表情や性格的印象は評価者ごとにばらつきが大きい、ということになる。そして、これは、第 1・第 2 実験のデータとはほぼ同様の傾向であるといつてよい。

また、二元配置分散分析の結果をみると、気質要因では身体の F 値が突出して高く、性・年齢要因では行動・表情の F 値が他に比較してやや高い。

第 2 実験に引続き、第 3 実験でも、SP 1 人 1 人や、SP の気質の違いを区別しやすい項目としては身体項目が最も有効であった。しかし、行動・表情項目と性格項目の間にはそれほど大きな有効性の差がみられなかった。

(2) 多変量解析データの検討

1) 次元性

続いて、多変量解析データの検討を行うために、33 項目を変数、SP×評価者を繰り返しとして、項目間の相関係数を計算した。そして、この相関係数行列を因子分析(主因子法)にかけた。ここでは、固有値が 1 以上の因子を直交回転することとし、ちょうど大きな落差のあった、6 因子までとることにした。そして、得られた 6 因子の負荷量行列をバリマックス回転にかけた。

回転後の負荷量の行列を図表 9-3 に示す。抽出された 6 因子の累積寄与率は 100% に近く、この 6 因子によってチェックリスト (3) の印象特徴のばらつきはほぼ説明しつくされたといつてよい。

得られた 6 因子の推定結果を図表 9-4 に示す。因子欄の % 付きの数字は各因子の寄与率を、また、項目欄の小数は各項目の因子負荷量を示している。

第 1 因子は、生き生きとした生命力、明るさ、活動性に、エネルギー、力強さを合わせたような、いわゆる『力本性 (dynamism) の因子』のようなものであろうと推定された。

第 2 因子は、『肉づきや体力の因子』と推定された。負荷量の高い項目の中に、「がっしり」と「丸い体型」が含まれているので、ここでいう肉づきというのは、厳密に言えば、やせているかどうか、ということになる。そして、肉づきがよけ

図表 9-3. 第3実験 回転後の因子負荷量の行列

因子	項目 No.	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6	項目名	h ²
I	V13	0.78831	0.08540	-0.25943	-0.02953	0.05133	-0.09426	明るい	0.708
	V14	0.75953	0.05332	-0.17452	0.01677	0.06571	-0.12242	表情が豊か	0.630
	V11	0.73472	0.10938	0.02151	-0.25379	0.15288	0.12741	活動的	0.656
	V15	0.72884	0.19475	0.03026	-0.18996	0.12366	0.10296	エネルギー感	0.632
	V25	0.72392	0.10341	-0.23596	0.14519	0.06371	-0.18261	愛想がいい	0.649
	V17	0.60392	0.05483	-0.11534	-0.20612	0.03851	0.33907	運動が好き	0.540
	V 8	0.56936	0.42128	-0.18695	-0.04933	0.11816	0.14281	健康的	0.573
	V 9	0.56525	0.22469	0.15265	-0.13677	0.03852	0.04573	声が大きい	0.416
	V12	0.54978	0.04479	0.05475	-0.12070	0.04436	0.09136	よく動く	0.332
	V28	0.53943	0.18711	-0.39052	0.34299	0.20727	-0.04024	あたたかい	0.641
	V16	0.53240	0.47622	0.06204	-0.10292	0.11398	0.13826	力強い	0.557
	V26	0.50655	0.14604	0.29802	-0.16779	-0.08790	0.05218	大胆	0.405
II	V 4	0.25888	0.82323	-0.00601	0.09566	0.00844	0.09679	がっしり	0.763
	V 2	0.17518	0.74512	0.07622	0.19295	-0.08060	-0.14029	首が太い	0.655
	V 5	0.14371	0.66594	-0.08496	0.23217	-0.02448	-0.36456	体型が丸い	0.659
	V10	-0.24867	-0.41046	0.29100	0.34992	-0.02319	-0.19031	体力がない	0.474
	V 7	-0.09239	-0.65142	0.22643	0.23608	0.01282	-0.01578	きゃしゃ	0.540
	V 6	-0.11370	-0.75332	0.23193	0.14563	-0.01293	0.19038	やせている	0.692
	III	V32	0.08495	-0.03596	0.69761	-0.06589	-0.09381	0.01654	見栄っぱり
V31		-0.22087	-0.12008	0.64545	-0.02174	-0.01377	0.09145	冷たい	0.489
V24		0.02413	-0.07102	0.62011	-0.03276	-0.01637	0.06162	気取っている	0.395
V55		-0.28330	-0.28017	0.47694	0.18574	0.12420	0.11005	神経質	0.448
IV		V30	-0.35915	-0.09467	0.08671	0.62840	-0.03198	0.09240	引っ込み思案
	V18	-0.14675	0.09011	-0.13910	0.61798	0.09444	-0.04167	おっとり	0.442
	V29	-0.43776	-0.12642	0.19867	0.58717	0.03148	0.09639	内向的	0.602
	V19	-0.41593	-0.12485	0.07102	0.52109	0.29740	0.12225	もの静か	0.569
	V27	0.27740	0.10894	-0.26915	0.52047	0.01426	-0.08069	お人好し	0.439
	V	V21	0.20633	0.05450	0.02594	0.03472	0.78946	-0.06023	物腰がきちんと
V22		-0.00713	0.02171	0.02697	0.18589	0.62992	0.01191	落ち着いている	0.433
V20		0.19868	-0.07238	-0.00374	0.06263	0.60197	0.06007	姿勢がいい	0.415
V23		0.01980	0.02916	0.27789	0.18638	-0.51408	0.05509	だらしない	0.381
VI		V 1	0.09555	-0.03891	0.09805	0.01919	-0.03483	0.64816	背が高い
	V 3	0.05349	-0.41219	0.16926	0.10245	0.02859	0.53564	首が長い	0.500
	固有値 (回転後)	5.9602	3.7642	2.4534	2.4465	1.9133	1.2710	(total: 17.8085)	
寄与率 (回転後)	0.3347	0.2114	0.1378	0.1374	0.1074	0.0714			
累積寄与率 (回転後)	0.3347	0.5461	0.6838	0.8212	0.9286	1.0000			

れば力強く見え、やせていれば体力がないように見えるように思われた。

第3因子は、『気取りや冷たさの因子』のようであった。ヒステリー性格の中の一側面を表しているようで、気取って冷たい感じの SP と、人のよさそうな SP とを区別する因子のようであった。

第4因子は、おっとり、もの静か、内向的、引

っ込み思案といった印象と、活動的な印象とを区別している、『おっとりさ、人のよさの因子』と推定された。

第5因子は、『姿勢のよさ、礼儀正しさ、落ちつき』と推定された。

第6因子は、『背の高さや身体各部の細長さの因子』のように思われた。

以上6因子が、第3実験で、身体、行動・表情、

図表 9-4. 第 3 実験 6 因子の推定結果

因 子	因子の推定結果	因子負荷量+の項目	因子負荷量-の項目
I 33.5%	力本性 明朗さ 活動性 精 力 力強さ	.79 明るい .76 表情が豊か .73 活動的 .73 エネルギッシュ .72 愛想がいい .60 運動が好き .57 健康的 .57 声大きい .55 よく動く .54 あたたかい .53 力強い .51 大 胆	-.44 内向的 -.42 もの静か -.36 引っ込み思案 -.28 神経質
II 21.1%	肉づき 体 力	.82 がっしり .75 首が太い .67 体型が丸い .48 力強い	-.75 やせている -.65 きゃしゃ -.41 首が長い -.41 体力がない
III 13.8%	気取り 冷淡さ	.69 見栄っぱり .65 冷たい .62 気取っている .48 神経質	-.39 あたたかい -.27 お人好し -.26 明るい
IV 13.7%	おっとりさ 人のよさ (出たがりかどうか)	.63 引っ込み思案 .62 おっとり .59 内向的 .52 もの静か .52 お人好し	-.25 活動的 -.21 運動が好き
V 10.7%	姿勢や物腰の安定 落ちつき	.79 物腰がきちんと .63 落ち着いている .60 姿勢がいい	-.51 だらしない
VI 7.1%	背の高さ 身体の細長さ	.65 背が高い .54 首が長い	-.36 体型が丸い

性格認知の基本次元として抽出されたものである。このうち、第 2 因子と第 6 因子が身体認知の次元、残りの 4 因子が行動・表情、性格認知の次元と考えられる。

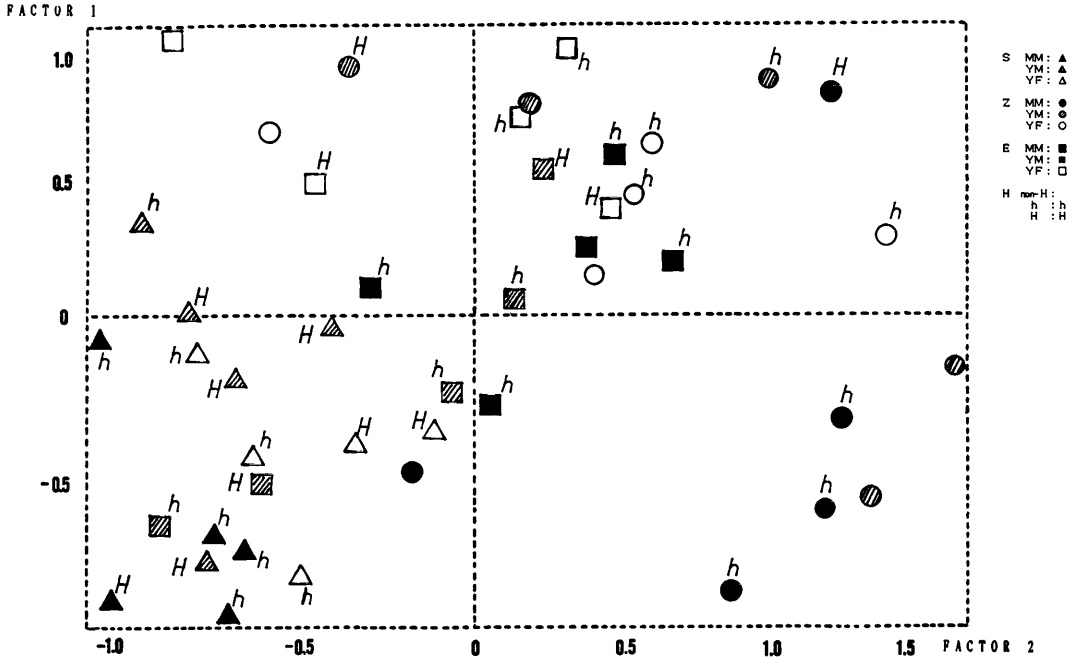
第 3 実験では、第 2 実験と刺激を 1 セットだけ変えてデータを取ってみたが、抽出された因子は、順番と寄与率に若干の相違がみられるものの、ほとんど同一内容のものであった。

2) SP の類型化

次に、SP ごとに因子得点を算出し、SP の類型化を行ってみた。実際には、これまでと同様、評

価者をならして、SP ごとの因子得点の平均値をデータとして用いている。

まず、6 因子から 2 因子を取り出し、その 2 次元の中での SP の布置を、因子得点の平均値を用いて表してみた。例えば、図表 9-5 は、第 1 因子(力本性)を縦軸、第 2 因子(肉づき、体力)を横軸にとって、SP の布置を、ランク・プロット式に示した図である(従って、縦横の目盛りは、順序性は保証されるが、間隔性は完全に正確なものとはいえない)。この図では、気質要因で SP が比較的きれいに分かれているようであった。



図表 9-5. 第3実験 因子得点による SP の布置 (第1因子 (力本性)×第2因子 (肉づき, 体力))

第3実験でも、抽出された各因子は気質要因や性・年齢要因あるいは H 要因をそのまま表しているものではないが、複数の因子を組み合わせることにより、前述の要因をうまく表現することができるようであった。また、それによってある程度 SP の類型化も可能であることが示唆された。そこで、SP ごとの6因子の因子得点の平均値をクラスター分析 (HALBAU; ウォード法) にかけて、基本6次元すべてを考慮に入れた SP の類型化を試みた。その結果を樹状図に表現したものを図表 9-6 に示す。ここでは、まず S の気質の SP がグループをつくり、さらに、E と Z の SP がそれぞれのグループに分かれた。すなわち、SP は、概略、気質条件によって分かれ、クラスターを作ることが明らかとなった。

(3) 次元性と SP の類型化の再確認

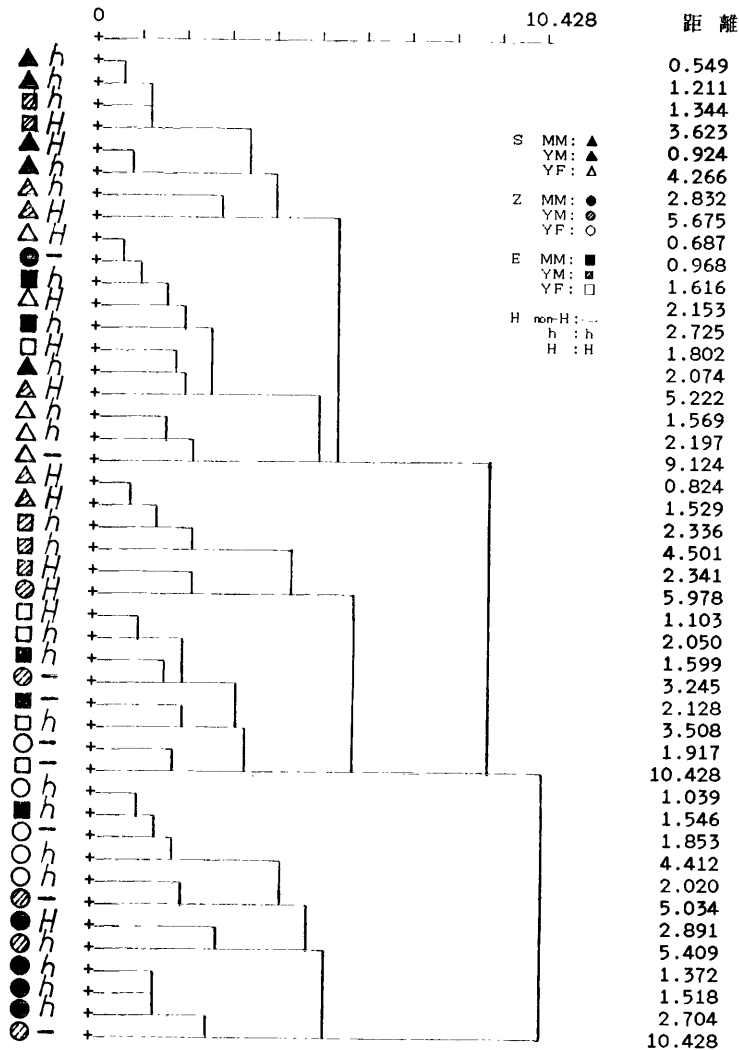
最後に、ここでもう一度、評価者は基本6次元を使って SP の何を捉えているのか、再確認をしておこうと思う。

第2・第3実験の6次元の因子得点を用いたクラスター分析結果からは、SP が、ほぼ気質要因で3つのクラスターに分かれることが明らかとな

った。また、いくつかの因子を取り上げると、複合的に、性・年齢要因あるいは H 要因と関連しているように見えるものもあることがわかった。

しかし、SP は本当に気質や性・年齢、H 要因だけで分けられているのであろうか。もともと、当研究では、評価者自身が SP を区別したり、SP の類似性を測っているわけではない。間接的に因子得点から、評価者による SP の分類を推測しているに過ぎない。そこで、1つ1つの因子がどんな要因を説明しているのか、改めて検討を加えることにした。つまり、6因子の因子得点を気質、性・年齢、H という3要因の分散分析にかけ、因子ごとに3要因の R-Square をもとめ、因子得点のばらつきの何パーセントを3要因によって説明できるか、分析してみようというわけである。

ここでは、SP ごとに算出されている因子得点の平均値を、さらに要因ごとにまとめて、分散分析その他の計算にかけた。図表 9-7 に、気質 (S-Z-E)、性・年齢 (MM-YM-YF)、H (nonH-h-H) の3つを要因とした6因子の因子得点の分散分析結果 (交互作用を含む) を載せる。I~VI が各因子、F が F 値、P が F の確率、× が交互作



図表 9-6. 因子得点 (I-VI) のクラスター分析 (ウォード法); 樹状図

用をあらわしている。また、計算されたR-Squareも一緒に載せておく。

さらに、その計算の元となった、3 要因の各カテゴリーごとの因子得点の平均値と標準偏差を図表 9-8 に載せる。また、各カテゴリー間の平均値の差の検定 (t-検定) 結果を図表 9-9 に載せる。ここでは t が t 値、P が t の確率である。

まず、図表 9-7 をみると、気質要因は 6 つの因子すべてに効いているとあってよい。第 3・第 4 因子の F 値はやや小さいが、それでも P は 0.09 未満である。また、性・年齢要因は第 2・第 4 因子を除く 4 因子に効いているが、H 要因は第 6 因

子を除いて、統計的にはあまり影響を及ぼしていないようである。気質要因と性・年齢要因との交互作用は、第 1・第 6 因子を除いてあまりなく、各性・年齢水準の中で気質の差が比較的均一に現れることを物語っている。さらに、これら 3 要因全体の説明率は一番低い第 4 因子で 61%、一番高い第 2・第 6 因子で 82% 程度と、かなり高い値を示している。従って、当研究の枠組みの中では、第 1 に気質要因、第 2 に性・年齢要因という 2 要因が、評価者が SP を分類する際に共通に持っていた基準として導出されたと考えてよい。

次に、図表 9-8、9-9 を参照しながら、各因子の

図表 9-7. 第3実験 6因子因子得点の分散分析
(3要因および交互作用のF値, 残差 MS, 説明率)

要 因	d.f.	I		II		III	
		F	P	F	P	F	P
気 質 (1)	2,23	13.88	0.0001**	25.29	0.0001**	2.68	0.0897(*)
性・年 齢 (2)	2,23	9.87	0.0008**	0.41	0.6664	12.43	0.0002**
H (3)	2,23	0.95	0.4031	1.96	0.1641	1.80	0.1872
(1)×(2)	4,23	4.21	0.0106*	0.82	0.5233	0.26	0.9008
(1)×(3)	4,23	1.59	0.2103	1.23	0.3263	0.25	0.9070
(2)×(3)	4,23	0.63	0.6473	2.84	0.0477*	0.13	0.9682
(1)×(2)×(3)	3,23	2.10	0.1285	2.27	0.1078	0.71	0.5545
残 差 MS		0.135		0.195		0.122	
説明率 (R-Square)		78.5%		81.7%		67.6%	
要 因	d.f.	IV		V		VI	
		F	P	F	P	F	P
気 質 (1)	2,23	3.15	0.0618(*)	3.78	0.0380*	12.27	0.0002**
性・年 齢 (2)	2,23	0.62	0.5453	18.73	0.0001**	15.03	0.0001**
H (3)	2,23	0.45	0.6437	0.28	0.7618	3.14	0.0624(*)
(1)×(2)	4,23	1.92	0.1407	0.69	0.6053	5.30	0.0036**
(1)×(3)	4,23	1.47	0.2425	0.94	0.4569	1.21	0.3343
(2)×(3)	4,23	2.25	0.0953(*)	1.27	0.3113	3.51	0.0222*
(1)×(2)×(3)	3,23	1.97	0.1464	0.84	0.4855	2.16	0.1197
残 差 MS		0.117		0.155		0.120	
説明率 (R-Square)		61.3%		73.7%		81.7%	

(**: P < 0.01
* : 0.01 ≤ P < 0.05
(*) : 0.05 ≤ P < 0.1)

図表 9-8. 第3実験 3要因群ごとの因子得点の平均値と標準偏差 (SD)

要 因	群	I		II		III	
		平 均	S D	平 均	S D	平 均	S D
気 質	S	-0.388	0.341	-0.651	0.218	0.230	0.467
	Z	0.178	0.594	0.691	0.696	-0.127	0.419
	E	0.230	0.509	-0.029	0.444	-0.078	0.329
性・年 齢	MM	-0.252	0.494	0.093	0.787	0.240	0.315
	YM	0.022	0.545	-0.043	0.801	0.168	0.392
	YF	0.250	0.543	-0.039	0.600	-0.383	0.303
H	—	0.127	0.556	0.199	0.835	-0.250	0.394
	h	-0.046	0.559	0.088	0.732	-0.016	0.422
	H	0.018	0.574	-0.282	0.575	-0.230	0.384
要 因	群	IV		V		VI	
		平 均	S D	平 均	S D	平 均	S D
気 質	S	0.115	0.306	0.108	0.602	0.078	0.330
	Z	0.095	0.435	-0.199	0.527	-0.373	0.534
	E	-0.220	0.329	0.097	0.453	0.284	0.619
性・年 齢	MM	-0.090	0.304	0.303	0.251	-0.170	0.501
	YM	-0.003	0.405	-0.551	0.522	0.431	0.493
	YF	0.083	0.437	0.253	0.333	-0.272	0.471
H	—	0.044	0.497	-0.053	0.470	0.002	0.422
	h	0.016	0.385	0.103	0.477	-0.143	0.572
	H	-0.069	0.305	-0.140	0.670	0.238	0.602

図表 9-9. 第3実験 因子得点の3要因群間の比較 (t-検定結果)

要因	群	d.f.	I		II		III	
			t	P	t	P	t	P
気質	S--Z	42	3.045	0.004**	7.208	0.000**	2.306	0.026*
	S—E	42	3.323	0.002**	3.342	0.002**	1.986	0.054(*)
	Z—E	42	0.279	0.782	3.866	0.000**	0.320	0.750
性・年齢	MM—YM	42	1.373	0.177	0.491	0.626	0.565	0.575
	MM—YF	42	2.516	0.016*	0.473	0.638	4.867	0.000**
	YM—YF	42	1.143	0.259	0.017	0.986	4.302	0.000**
H	—h	42	0.757	0.453	0.382	0.704	1.418	0.164
	—H	42	0.432	0.668	1.502	0.141	2.635	0.012*
	h—H	42	0.318	0.752	1.445	0.156	1.686	0.099(*)

要因	群	d.f.	IV		V		VI	
			t	P	t	P	t	P
気質	S—Z	42	0.152	0.880	1.530	0.134	2.347	0.024*
	S—E	42	2.456	0.018*	0.051	0.960	1.069	0.291
	Z—E	42	2.304	0.026*	1.479	0.147	3.416	0.001**
性・年齢	MM—YM	42	0.597	0.554	5.855	0.000**	3.254	0.002**
	MM—YF	42	1.181	0.244	0.349	0.729	0.552	0.584
	YM—YF	42	0.584	0.562	5.506	0.000**	3.806	0.000**
H	—h	42	0.181	0.857	0.713	0.480	0.642	0.525
	—H	42	0.650	0.519	0.360	0.720	0.947	0.349
	h—H	42	0.607	0.547	1.258	0.215	1.910	0.063(*)

(**): $P < 0.01$
 (*): $0.01 \leq P < 0.05$
 (*): $0.05 \leq P < 0.1$

内容を順番にみていこう。

第1因子(力本性)では、ZとEの区別はできないが、Sの力本性が低く捉えられている。また、YFはMMより力本性が高いが、その中間に位置するYMはどちらとも差がなく捉えられている。

第2因子(肉づき, 体力)では、性・年齢による差はみられないが、 $Z > E > S$ という、肉づき(体力)の差がはっきりと捉えられている。

第3因子(気取り, 冷淡さ)では、SのSPが他の気質のSPに比べてやや高く、また、YFのSPが他の性・年齢のSPに比べて低く、評価されている。

第4因子(おっとりさ, 人のよさ)では、EのSPが他の気質のSPに比較して低く捉えられているほかは、群間に差がない。

第5因子(姿勢や物腰の安定, 落ちつき)では、YMのSPやZのSPが他の群のSPに比較してだらしなく捉えられている。ただし、ZのSPと他の気質のSPとの差は、統計的に有意にはならない、ごくわずかなものであった。

第6因子(背の高さ, 身体の細長さ)では、他の群のSPに比較して、ZのSPが低く、YMのSPが高く評価されているほか、Hの高いSPはHの低いSPに比べてやせているという評価がなされている。

以上、当研究で明らかになった対人認知あるいはIPTの次元性に関する知見を再検討してまとめた。これらの知見は、3つの本実験を通してほぼ一貫して現れており、信頼性に関してはかなり保証されたものと考えられる。

10

まとめと考察

1. 対人認知刺激としてのビデオ映像……55
2. 対人認知の内容（枠組み）……56
3. 身体，行動・表情，性格認知の次元……56
4. SP の類型化と体質心理学……58
5. 対人認知研究の展望……59

第 10 章では，研究のまとめとして，第 3 章その他のところで提示したいいくつかの課題ごとに，得られた成果と提起された問題点について述べて行くことにしたい。ここで検討する課題は，次の 5 つである。

- (1) 対人認知刺激としてのビデオ映像
- (2) 対人認知の内容（枠組み）
- (3) 身体，行動・表情，性格認知の次元
- (4) SP の類型化と体質心理学
- (5) 対人認知研究の展望

以下，順に，述べていくことにする。

1. 対人認知刺激としてのビデオ映像

当研究でビデオ映像を刺激として用いるにあたっては，第 3 章において，ビデオ映像の持つ特殊性について若干の検討を行った。対人認知研究にビデオ映像が使われた例は数少なく，ビデオ映像を刺激として用いる場合の問題点や一般的な傾向を，先立つ対人認知研究の中で検討することは難しかった。しかし，実験場面におけるコミュニケーション・メディア，あるいは deception の手段としてのビデオ映像の役割を検討

した研究，記憶教材としてのビデオ映像の役割を検討した研究などでは，非言語的な手がかりの多さ，多様さに対応して，ビデオ映像や映画の有効性が強調されていた。ビデオ映像は，対人認知の刺激としては間接的な材料であるが，その中では，現実の人物にかなり近い情報の質と量を持っている刺激ということができるだろう。

Allport (1961) のいうように，対人認知研究は我々の現実の他者認知機能を探求するものである以上，用いられる刺激としては，評価者の目の前にいる人物が最もふさわしい。しかし，実験事態での刺激統制という側面をも考えあわせると，実在の人物と同じような多様な情報を持っている映像を，複数の評価者の前に同じように提示できるビデオ映像は魅力的である。

当研究では，刺激としてビデオ映像を使用した。また，第 1 実験では，写真を刺激とした統制実験もあわせて行って，間接的な対人認知研究用刺激としてのビデオ映像の有効性について検討した。写真を刺激とした印象形成実験では，一致しやすいのは身体項目だけといってよかった。それに比べてビデオ映像は，身体のみならず，行動・表情，性格といった広範囲の印象を一致させ

やすいことがわかった。

当実験で用いられたビデオ映像は、気質要因と性・年齢要因で統制されている以外は、なんらの条件統制も加えられていない。写真刺激も同様である。服も姿勢も話題も話相手もすべてその場の状況に依存していた。人間研究では、SPに条件統制が加えられていなければいらず、不自然な状況が観察者に与えられがちである。対人認知研究でも、間接的な刺激を用いた実験では、いろいろな条件統制が加えられていることが多い。そうした人物刺激を用いた対人認知研究に対する疑問も、当研究の出発点の1つであった。著者は、ほとんど条件統制を加えていない、自然な状況を撮影したビデオ刺激を用いて対人認知研究を行い、ある程度の成果を得たことで、従来の間接的な人物刺激に対する考え方に小さな一石を投じたつもりである。

2. 対人認知の内容（枠組み）

第II予備実験では、評価者の自由記述をKJ法で内容分析することによって、SPの外観・内面の特徴を6つのカテゴリー（大項目）に分類した。すなわち、「身体」「行動・表情」「性格」「能力」「評価」「生活」である。

これを第3章第4節にあげた、Beach & Wertheimer (1962)の研究にもとづく齊藤(1983)の対人認知の内容と比較すると、次のようになる。相違点はごくわずかである。齊藤の「社会的背景」と「社会的活動」の次元が、第II予備実験では「生活」というカテゴリーにまとめられている。また、齊藤の「社会的相互作用」の次元がここではみられない。彼の「能力の認知、評価」が、ここでは「能力」と「評価」に分かれている。これら3点を除くと、内容はほとんど一致している。従って、当研究では、対人認知の全体的な内容（枠組み）は、「身体」「行動・表情」「性格」「能力」「評価」「生活」の各カテゴリーから成っているものと考えたことにした。

次に、各カテゴリーの使用頻度をみると、第II予備実験のデータをみるかぎり、「身体」「行動・表情」「性格」の3カテゴリーの頻度が高

いようである。当研究では、「能力」と「評価」カテゴリーの頻度はそれほどでもない。しかし、林(1978b)の研究で抽出された基本3次元をはじめとして、性格認知次元とOsgoodら(1957)の意味の3次元との関連を意識している研究では、「評価」カテゴリーのウェイトが相対的に高い。それらの研究では、たとえば、あたたかい、明るい、愛想がいいといった、パーソナリティ特性の集合に対して、上位概念として「評価」カテゴリーをもって来る。著者は、Peabody(1967)のように評価に関する次元を完全に否定するものではないが、林(1978b)らのように評価次元をあまり広い概念で捉えることには抵抗がある。第II予備実験の内容分析の結果では、「能力」と「評価」のカテゴリーに該当する共通的な特徴語は、ほぼ知的能力の「高-低」、好意度の「好き-嫌い」で代表しつくされるように思えた。

また、第II予備実験で出された「生活」カテゴリーは、ある意味では、対人認知項目の坩堝であった。カテゴリー全体の頻度はそれほど低いものではないが、それに含まれる項目数が多く、1つ1つの項目の頻度はかなり低い。つまり、当研究で得られた6つのカテゴリーのうち、「生活」カテゴリーはそれを構成する1つ1つの項目にあまり共通性・一般性がないようであった。

そこで、さらに進んで、具体的に内容を検討するカテゴリーを「身体」「行動・表情」「性格」の3カテゴリーに限定して、研究を適正規模に抑えることにした。

3. 身体、行動・表情、性格認知の次元

第2・第3章で述べたように、従来の対人認知研究では、性格に焦点をあてた性格認知の研究が多数行われてきた。相貌特徴と性格特徴との関連研究も比較的多く行われてきた。しかし、当研究のように、身体、行動・表情、性格の認知を同一の水準で分析しようとする研究は、Beach & Wertheimer (1962)などを除いて、ほとんど行われていない。

また、評定の際に使用される評価項目（SPについて記述するためのカテゴリー）に関しても、

その一般性・共通性を検討している研究は、Beach & Wertheimer (1962) や Hastorf ら (1965) など、少数のものに限られる。恣意的に選択された評価項目が、評価者にとって一般的な言葉かどうか、評価者全員に共通の意味を持つものであるかどうか、といった検討はあまり行われて来ていない。これも、先立つ対人認知の次元性の研究の成果を混乱させている原因の1つのように思われる。当研究では、自由記述を内容分析して作成したチェックリストを、3つの本実験を通して2回見直しして、評価項目の一般性・共通性について検討を行ってきた。

当研究では、第1実験から第3実験まで、身体、行動・表情、性格認知の因子として、一貫して、ほぼ共通の因子が抽出された。この6因子の累積寄与率は相当高く、当研究で用いられた印象特徴項目のばらつきはこの6因子によってほぼ説明しつくされているとよかった。

まず、必ず第1因子として抽出されたものは、明るさ、活動性、エネルギー、力強さ、生き生きとした生命力を合わせたような因子であった。常に25~30%ほどの寄与率を持っていた。この因子は、先立つ性格認知研究でも、活動性、社交性、強靱性、積極性の因子、あるいはそれらを総合したような力本性 (dynamism) の因子とされているものであった。当研究でも、この第1因子は、『力本性の因子』と名づけることにした。

さらに、行動・表情、性格認知の因子としては、『気取りや冷たさの因子』、『おっとりさ、人のよさ、もの静かさの因子』、『姿勢のよさ、礼儀正しさ、落ちつきの因子』が抽出された。行動・表情、性格の因子は都合4つである。これらの因子の中では、『姿勢、礼儀、落ちつきの因子』が先立つ研究の「社会的望ましさ」や「道徳」「責任」などの因子との関連を感じさせるほかは、オリジナリティの高いもののようにであった。

一方、身体認知因子は、行動・表情、性格認知の因子とはほぼ独立した形で、身体の縦横方向の大きさを表していると思われる2因子が抽出された。寄与率は両者あわせて大体25%前後であったが、常に高いほうが、『肉づき、体力の因子』であった。これは、「やせて肉づきが悪いかどうか」

を評価する因子であった。そして、負荷量がマイナスの項目には、やせている、きゃしゃ、体力がないといった項目が、また、高い項目には、太っている、がっしりしている、体力がある、力強いといった項目が含まれていた。やせていると体力がなく見え、肉づきがいいと力強く体力があるように見えるようであった。

もう一つの身体認知因子は、『背の高さ、身体各部の細長さの因子』であった。これは、背の高さだけでなく、首や手足といった身体各部の細長さまでも含んでいるように思われた。

このように抽出された次元の一般性・共通性に関しては、最低限、次の2点について検討しておかなければならないだろう。

当研究では、身体、行動・表情、性格の特徴のバラエティを保證するために、Kretschmer-Sheldon の気質の3類型を外的基準として、SPを収集、選択した。また、チェックリスト項目も、はじめは単に自由記述されたSPの特徴を内容分析したものをういたが、段階を追って、評価者要因、気質要因、性・年齢要因でばらつきの少ない項目を捨てていった。従って、当研究では、後の実験になるほど、チェックリストの構成にSPの気質要因その他の影響が反映されていった可能性を否定できない。しかし、逆に言うと、第1実験のように、気質要因その他の影響をほとんど受けていないチェックリストを用いた実験条件のもとでも、第3実験のように、そうした影響をある程度受けた実験条件のもとでの次元性とほとんど一致する次元性が得られたということは、当実験で抽出された諸次元の共通性・一般性が、そうした条件の影響を越えて、強いものであることを裏づけているようにも思われる。

もう1つは第1実験でも述べた、中里ら (1976) の「言語的要因の介在」の問題である。つまり、対人認知の評価者は、SPの特徴を評価しているというより、チェックリストの特徴項目の類似性を評価しているのではないかという疑問である。当研究でも、第1実験のビデオ実験と写真実験は同一のチェックリストを使用しており、また、データにかなりの一致をみたので、一応の検討を試みてみた。その結果、第1実験では、「言語的

要因の介在」を完全に否定することはできなかったが、2つの実験のデータを詳細にみていくと、そこに、ビデオ実験と写真実験の違いがあらわれていた。評価者は、少なくともデータに現れる程度には、刺激の違いに応じて異なる反応をしていたことが明らかとなった。

4. SP の類型化と体質心理学

評価者は、抽出された基本6次元を使って、SPの印象特徴を捉え、認知し、弁別していた。第2・第3実験の6因子の因子得点をデータとしたクラスター分析から、SPが気質要因で3つのクラスターに分かれることが明らかとなった。

また、気質、性・年齢、Hの3つを要因とした、因子得点の分散分析からは、個々の因子を取り上げると、気質要因に効いているものもあれば、性・年齢要因あるいはH要因に効いているものもあることがわかった。各次元ごとに結果を見ると、気質要因は、6つの因子すべてに効いていることが明らかとなった。また、性・年齢要因は、『肉づき、体力因子』、『おっとりさ、人のよさ因子』を除く4因子に効いているが、H要因は、『背の高さ、身体各部の細長さ因子』を除いて、統計的にはほとんど影響を及ぼしていないことがわかった。また、気質要因と性・年齢要因との交互作用はあまりなく、これは、各性・年齢水準の中で気質の差が比較的均一に現れることを物語っているように思われた。さらに、これら3要因全体の説明率(R-Square)は、各因子で60~80%程と、かなり高い値を示していた。従って、当研究の枠組みの中では、気質、性・年齢という2要因のみ

が、評価者がSPを区別する際に共通に使用する基準として導出されたものと考えられた。

図表10-1に、対人認知における基本6次元と、SPの気質(体質)要因、性・年齢要因との関連についてまとめた表を載せる。この表は、おもに第3実験のデータを使って、1つ1つの次元(因子)が2つの要因のどんな印象特徴を区別しているのか、まとめたものである。

しかし、印象評定から得られた認知の次元によって、Kretschmer-Sheldonの3類型における体質と気質の関連がすべて表現されていると考えるのは、当然のことながら間違いである。計測データを使いながら実際の体質と気質との関連を探求したKretschmer(1955)やSheldon(1940, 1942)の研究と、印象特徴の評価を通してSPの類型化を探求した当研究では、その方向性が異なっている。前者は自然(形質)人類学的な方向性をもち、後者は対人認知研究の範疇に入る。

当研究の実際のデータを見ても、評価者に共通なIPTの枠組みの中に、Kretschmer-Sheldonの3類型とは異なる相貌と気質の関連性が随所にみられた。たとえば、がっしり、ふっくらしているようにみえる人は知的能力が低く評価されていた。Zは知的能力が低く評価された。やせて、鼻筋が通ってみえる人は知的能力が高く評価された。そして、このようなIPTの内容は、榎田・櫃田(1971)や、大橋ら(1976)でも報告されていた。

また、『力本性』という対人認知の次元は、Kretschmer-Sheldonの3類型の枠組みからいえば、ZとEの特性を一緒に合わせ持つ次元であった。

図表10-1. 身体、行動・表情、性格の基本6次元とSPの気質(体質)、性・年齢要因との関連

		I 力本性	II 肉づき 体力	III 気冷 取淡 りさ	IV おっとりさ 人のよさ	V 姿勢物腰 落ちつき	VI 背の高さ 身体の細長さ
気質	S	低い	細い	繊細・冷たい	ポーッ	硬い	高・細い
	Z	活動的・明るい エネルギー	太い	低い	おっとり	よく動く	低・丸い
	E		中間	低い	低い	硬い	高・骨太
性・年齢	MM	低い					
	YM	中間				やや悪い	高・細長い
	YF	高い		低い			

『肉づき因子』に対してともに負荷量の大きい、太っているという項目と、がっしりしているという項目の問題も同様である。体質心理学の枠組みからいえば、両者は区別されるものである。しかし、当実験の印象評定では両者はいま一つはつきりとは区別できないものようであった。

当研究で気質の差異を印象評定する際に有効であった身体項目は、最終的には、体型を除いて、首の長さ、首の太さに集約されてしまった。すなわち、細く長い首は S の特徴、太く短い首は Z の特徴、太く長い首は E の特徴、という具合である。そして、胸の厚さ、肩の広さ、あごの発達程度、顔の大きさといった項目は、研究の途中で削除されてしまった。確かに、裸の人物を観察しているわけではないので、胸や肩に関する項目が削除対象になり、観察可能な首の印象が最後まで残ったのは納得のいくところではあった。そして、首の特徴による SP の類型化はわれわれの臨床的印象とも一致していた。しかし、顔の大きさやあごの発達程度といった、相貌特徴としては気質による差異が明確に認められ、しかもいつでも観察可能な項目が削除対象となったことはやや意外であった。

Kretschmer の共同研究者の中で、Schick は、身体計測データ（印象データではない）を用いて、身体特徴の因子分析をしている。彼は、各々 50 ケースずつ、計 150 ケースの S-Z-E 純型の体型について、24 項目の計測データを因子分析して、長さ、幅、末端、周囲、中部顔面（の高さ）、解釈不能の因子、という 6 つの身体因子を抽出している（Kretschmer, 1955）。当研究では、その第 1 因子・第 2 因子と同様の因子を抽出したが、あごや手足、指といった末端の因子以下は抽出されなかったということになる。

当研究で明らかになった対人認知あるいは IPT の次元性に関する知見、SP の類型化に関する知見は、3 つの本実験を通してほぼ一貫して現れており、信頼性に関しては十分に保証されたものと考えられる。

第 2 章で紹介した先立つ性格認知の次元性に関する研究の中には、SP の実際のパーソナリティ要因を用いて、SP のクラスターを分析した研究

は 1 つもない。他の次元性研究では、SP はどんな具合にグルーピングされたのであろうか。著者には非常に興味ある問題であるが、資料はまったくない。最近の対人認知研究の視点は、認知の枠組みの中での SP の個人差を分析する方向ではなく、評価者の認知の枠組みの個人差を探索する方向に動いている。池田（1987）も主張している通り、対人認知研究においても、SP の個人差をいろいろな角度から探索する研究が望まれるところである。

5. 対人認知研究の展望

最後に、対人認知研究の展望について、当研究の知見に若干の推測を交えながら、思うところを述べて、当論文を締めくくりたいと思う。

まず、次元性の問題について考えてみようと思う。認知者に共通な対人認知の枠組みは、少なくとも 3 次元よりはかなり多い数の次元から構成されているように思う。これらの次元が、Osgood ら（1957）の意味の 3 次元と関連しているかどうかはいささか議論の分かれるところであるが、いくつもの次元の中に、評価や能力、活動性に関する次元が含まれることは確かなようである。

さらに、評価者の認知の枠組みの個人差を探索している最近の研究では、当然ながら、従来の共通次元の抽出を試みた研究よりもかなり多種多様な次元を抽出している。

池田（1987）によれば、「顔グラフ」（原，1978）の方法によって一目で読み取ることのできる顔面特徴のパラメータ数は 11 を越えるという。個々の評価者が持つ対人認知の次元は、一般的な対人認知の次元数を越えて、かなりの数にのぼる可能性がある。

こうした個人的な対人認知の次元を探ることも今後の対人認知研究の課題の 1 つといえるが、個人的な対人認知の次元と共通次元とを比較したり結びつけたりすることは方法論的に難しいようで、いまだ決定的な報告は出されていない。

次に、対人認知において捉えられる特徴の内容について言及しておきたい。当研究においては、「身体」「行動・表情」「性格」といった対人認知の

枠組みの中で、『力本性』『肉づき、体力』『気取り、冷淡さ』『おっとりさ、人のよさ、もの静かさ』『姿勢、物腰、落ちつき』『背の高さ、身体各部の細長さ』という6因子が抽出された。しかし、認知者がこうした1つ1つの特徴(次元)を捉えることを目的にして対人認知をしているわけではないことは、ほとんどの対人認知研究者の一致した見解であろう。認知者にとっては、個人的なIPTの枠組みの中で、認知可能な次元から得られた情報を総合し、認知者なりの(一般的には比較的単純な)被認知者像を作り上げることが最終的な目的なのである。対人認知の次元数は確かにかなりの数に及ぶかもしれない。しかし、実際に認知者が捉えたと意識する被認知者の特徴はそれほど多くはないかもしれない。林(1978b)らは、Osgoodの概念を借りて、それを3次元にまとめたとも言える。当研究でも、抽出された6次元の中のばらつきのかかなりの程度は、SPの2要因で説明がついた。

当研究では、そうした認知者の最終的な認知像の中に、Kretschmer-Sheldonの体質心理学の知見に類似した、身体、行動・表情、性格相互の関連性が見いだされた。こうしたIPTの内容は、当論文の冒頭で述べたKretschmer(1955)のいう、大衆観念の沈澱物の内容とほとんど同一のものであった。しかし、Kretschmer(1955)はそうした大衆観念の沈澱物にはあまり注意を払わず、

実証的な体質と気質との関連研究を進めて、膨大な体質心理学の体系をうちたてた。

当研究では、一般の人々の間にも、対人認知(IPT)の基準として、Kretschmer-Sheldonの3類型の内容に類似した枠組みが存在することを推測させるデータが得られた。もちろんその内容は、実際の体質と気質の関連そのままではない。単純化・平明化された体質・気質の関連に、「大衆観念の沈澱物」が加わったもののようであった。そして、評価者は、そうしたIPTの枠組みを用いて、身体、行動・表情、性格に関する印象すべてを総合して、SPをKretschmer-Sheldonの3類型に近い形にグルーピングしているようであった。

Kretschmerが答えを出さずに残した大衆観念の沈澱物は、現実に一般の人々の心の中にIPTの枠組みの一部として存在していた。

『肥っちょはどこか気だてのよい愚かさを備えており、朗らかで、社交的で、現実的であるように見えるようだった。常識あるおかみさんは、ずんぐりして、まんまるな姿で、手を腰にあて、腕を張った格好をしているものようであった。聖者たちは、ひょろりとした姿で、手足は長く、眼光は鋭く、顔色は青ざめている姿がふさわしいようであった。』

- Allport, G. W. 1937 *Personality: A psychological interpretation*. New York: Henry Holt.
- Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. New York: Holt, Rinehart and Winston. [今田 恵 (監訳) 1968 人格心理学 誠信書房]
- Aronovitch, C. D. 1976 The voice of personality: Stereotyped judgments and their relation to voice quality and sex of speaker. *Journal of Social Psychology*, 99, 207-220.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Banister, D. & Mair, J. M. M. 1968 *The evaluation of personal constructs*. New York: Academic Press.
- Beach, L. & Wertheimer, M. 1962 A free response approach to the study of personal cognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 367-374.
- Benson, P. L., Severs, D., Tatgenhorst, J., & Loddengaard, N. 1980 The social costs of obesity: A non-reactive field study. *Social Behavior and Personality*, 8, 91-96.
- Bevan, W., Secord, P. F., & Richards, J. M. 1956 Personalities in faces: V. Personal identification and the judgment of facial characteristics. *Journal of Social Psychology*, 44, 289-291.
- Bieri, J. 1955 Cognitive complexity-simplicity and predictive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 263-268.
- Bieri, J., Atkins, A. L., Briar, S., Leaman, R. L., Miller, H., & Tripodi, T. 1966 *Clinical and social judgement: The discrimination of behavioral information*. Wiley.
- Bonarius, J. C. T. 1965 Research in personal construct theory of George A. Kelly. In B. A. Maher(Ed.), *Progress in experimental personality research, Vol. 2*. New York: Academic Press.
- Bruner, J. S. & Tagiuri, R. 1954 The perception of people. In G. Lindzey(Ed.), *Handbook of social psychology, Vol. 2*. Cambridge: Addison Wesley.
- Brunswik, E. 1947 *The conceptual framework of psychology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Brunswik, E. 1956 *Perception and the representative design of psychological experiments*. Berkeley: University of California Press.
- Burdick, J. A. & Tess, D. 1983 A factor analytic study based on the atlas of men. *Psychological Reports*, 52, 511-516.
- Carroll, J. D. & Chang, J. J. 1970 Analysis of individual differences in multidimensional scaling via an n-way generalization of "Eckart-Young" decomposition. *Psychometrika*, 35, 283-319.
- Caskey, S. R. & Felker, D. W. 1971 Social stereotyping of female body image by elementary age girls. *Research Quarterly*, 42, 251-255.

- Cohen, R. 1969 *Patterns of personality judgment* [Translated and edited by Schaeffer, D. L. 1973]. New York: Academic Press.
- Cronbach, L. J. 1955 Processes affecting scores on "understanding others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- D'Andrade, R. G. 1965 Trait psychology and componential analysis. *American Anthropologist*, 67, 215-228.
- Dannenmeir, W. D. & Thumin, P. J. 1964 Authority status as a factor in perceptual distortion of size. *Journal of Social Psychology*, 63, 361-365.
- Denis, M. & de Pouqueville, P. 1976-77 Realism of figuration and memory for concrete actions. *Bulletin de Psychologie*, 30, 543-550.
- DePaulo, B. M., Rosenthal, R., Eisenstat, R. A., Rogers, P. L., & Finkelstein, S. 1978 Decoding discrepant nonverbal cues. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 313-323.
- Domey, R. G., Duckworth, J. E., & Morandi, A. J. 1964 Taxonomies and correlates of physique. *Psychological Bulletin*, 62, 411-426.
- Dymond, R. F. 1949 A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.
- Dymond, R. F. 1950 Personality and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 343-350.
- Ekman, P., Friesen, W. V., O'Sullivan, M., & Scherer, K. 1980 Relative importance of face, body, and speech in judgments of personality and affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 270-277.
- Estes, S. G. 1938 Judging personality from expressive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 33, 217-236.
- Gross, C. F. 1961 Intrajudge consistency in ratings of heterogeneous persons. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 605-610.
- Hakel, M. D. 1969 Significance of implicit personality theories for personality research and theory. *Proceedings of the 77th Convention of the American Psychological Association*, 403-404.
- 原文雄 1978 顔グラフによるコミュニケーション 自然, 1978年9月号, 26-35.
- Hastorf, A. H., Kite, W. R., Gross, A. E., & Wolfe, L. J. 1965 The Perception and evaluation of behavior change. *Sociometry*, 48, 400-410.
- 林文俊 1978a 相貌と性格の仮定された関連性(3)——漫画の登場人物を刺激材料として 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 41-56.
- 林文俊 1978b 対人認知構造の基本的次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 233-247.
- 林文俊 1979 対人認知構造における個人差の測定(4)——INDSCALモデルによる多次元解析的アプローチ 心理学研究, 50, 211-218.
- 林文俊・大橋正夫・広岡秀一 1983 暗黙裡の性格観に関する研究(I)——個別尺度法によるパーソナリティ認知次元の抽出 実験社会心理学研究, 23, 9-25.
- 林文俊・津村俊充・大橋正夫 1977 顔写真による相貌特徴と性格特性の関連構造の分析 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 24, 35-42.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. Wiley. [大橋正夫(訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房]
- 広兼孝信・吉田寿夫 1984 印象形成における手がかりの優位性に関する研究 実験社会心理学研究, 23, 117-124.
- 広岡秀一 1989 対人認知, In 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ1——個人から他者へ 誠信書房.

- 榎田紋子・榎田 仁 1970 パーソナリティと対人認知 2. —顔写真を刺激とした場合—日本心理学会第 34 回大会発表論文集, 420.
- 飯島婦佐子 1961 対人認知の構造についての因子分析的研究 日本心理学会第 25 回大会発表論文集, 455.
- 池田 進 1987 人の顔または表情の識別について 上——初期の実験的研究を中心とした史的展望——関西大学出版部.
- 伊藤隆一・榎田 仁・平野 学・川島 真 1981 ヴィデオ映像によるパーソナリティ評価——I 日本心理学会第 45 回大会発表論文集, 592.
- 伊藤隆一・榎田 仁・兼高聖雄 1989 ヴィデオ映像によるパーソナリティ評価 (3) 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 151.
- 伊藤隆一・榎田 仁・兼高聖雄・弘田直人・川島 真・小林和久 1983 パーソナリティ評価における評価者の感度の問題 日本心理学会第 47 回大会発表論文集, 625.
- 伊藤隆一・榎田 仁・兼高聖雄・小林和久 1988 ヴィデオ映像によるパーソナリティ評価 (2) 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 133.
- Johnson, L. 1955 *Stereotypes and perceptual distortion*. Honors thesis. Mary Washington College. Cited in Secord, P. F. 1958.
- Jones, R. A. & Rosenberg, S. 1974 Structural representation of naturalistic description of personality. *Multivariate Behavioral Research*, 9, 217-230.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中央公論社 (中公新書 136).
- 川喜田二郎 1970 続・発想法 中央公論社 (中公新書 210).
- Kelly, G. A. 1955 *The psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- Kim, M. P. & Rosenberg, S. 1980 Comparison of two structural models of implicit personality theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 375-389.
- Kretschmer, E. 1955 *Körperbau and Charakter*, 21/22th ed.. Springer-Verlag, 1st ed. 1921. [相場 均 (訳) 1960 体格と性格 文光堂]
- Kuusinen, J. 1969 Affective and denotative structures of personality ratings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 12, 181-188.
- Lay, C. H. & Jackson, D. N. 1969 Analysis of the generality of traitinferential relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 12, 12-21.
- Levy, L. H. & Dugan, R. D. 1960 A constant error approach to the study of dimensions of social perception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 61, 21-24.
- 榎田 仁 1983 SCT 筆跡による性格の診断 金子書房.
- 榎田 仁・榎田紋子 1970 パーソナリティと対人認知 1. —顔写真を刺激とした場合—日本心理学会第 34 回大会発表論文集, 419.
- 榎田 仁・榎田紋子 1971 パーソナリティと対人認知 3. —顔写真を刺激とした場合—日本心理学会第 35 回大会発表論文集, 447-450.
- 榎田 仁・小谷津孝明・伊藤隆一・平野 学・川島 真 1981 パターン認識の諸技法を用いた筆跡とパーソナリティの関係に関する実証的研究——その 1. 研究室モノグラフ.
- 榎田 仁・小谷津孝明・伊藤隆一・渡辺利夫・平野 学 1981 筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究——I. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 21, 85-95.
- 榎田 仁・小谷津孝明・小林ポオル・伊藤隆一・平野 学・川島 真 1982 パターン認識の諸技法を用いた筆跡とパーソナリティの関係に関する実証的研究——その 2. 研究室モノグラフ.
- 榎田 仁・小谷津孝明・小林ポオル・伊藤隆一・川島 真・兼高聖雄 1987 パター認識の諸技法を用いた筆跡とパーソナリティの関係に関する実証的研究——その 3. 研究室モノグラフ.
- Manstead, A. S., Wagner, H. L., & MacDonald, C. J. 1984 Face, body, and speech as channels of communication in the detection of deception. *Basic and Applied Social Psychology*, 5, 317-332.

- 松原敏浩・内田敏夫 1979 パーソナリティ認知の多次元的研究——次元の一般性におよぼす Stimulus Person および被験者の性の影響について 実験社会心理学研究, 19, 107-117.
- 三井宏隆 1976 実験場面におけるコミュニケーション・メディアの役割について 実験社会心理学研究, 16, 163-169.
- Mulaik, S. A. 1964 Are personality factors raters' conceptual factors? *Journal of Consulting Psychology*, 28, 506-511.
- 中里浩明・Bond, M. H.・白石大介 1976 人格認知の次元性に関する研究——Norman 仮説の検討 心理学研究, 47, 139-148.
- Norman, W. T. 1963 Toward an adequate taxonomy of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality rating. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 574-583.
- Nygren, T. E. & Jones, L. E. 1977 Individual differences in perception and preferences for political candidates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 182-192.
- 落合 勲 1983 パーソナリティ認知の研究——職業名をSPとして 日本心理学会第47回大会発表論文集, 797.
- 小川一夫・吉田寿夫 1983 対人認知の次元ウェイトに関する研究 広島大学教育学部紀要, 1, 31, 193-200.
- 大橋正夫・三輪弘道・平林 進・長戸啓子 1973 写真による印象形成の研究(2)——印象評定のための尺度項目の選定 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 20, 93-102.
- 大橋正夫・三輪弘道・長戸啓子・平林 進 1972 写真による印象形成の研究——序報—— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 13-25.
- 大橋正夫・長戸啓子・平林 進・吉田俊和・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1976 相貌と性格の仮定された関連性(1)——対をなす刺激人物の評定値の比較による検討 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 23, 11-25.
- 大橋正夫・吉田俊和・鹿内啓子・平林 進・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1977 相貌と性格の仮定された関連性(2) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 24, 23-33.
- Osgood, C. E. 1962 Studies on the generality of affective meaning systems. *American Psychologist*, 17, 10-28.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 *The Measurement of meaning*. Urbana: University of Illinois Press.
- Parnell, R. W. 1958 *Behavior and physique*. London: Arnold Press.
- Passini, F. T. & Norman, W. T. 1966 A universal conception of personality structure? *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 44-49.
- Peabody, D. 1967 Trait inferences: Evaluative and descriptive aspects. *Journal of Personality and Social Psychology Monograph*, 7 (4, whole No. 644).
- Pedersen, D. M. 1965 The measurement of individual differences in perceived personality-trait relationships and their relation to certain determinants. *Journal of Social Psychology*, 65, 233-258.
- Rai, S. N. & Srivastava, K. M. 1976 Effects of visual, verbal and auditory information on indirect person-perception. *Psychologia: An International Journal of Psychology in the Orient*, 19, 102-107.
- Rai, S. N. & Srivastava, R. K. 1977 Effects of direct and indirect presentation methods on person-perception. *Journal of Psychological Researches*, 21, 19-23.
- Rosenberg, S. 1977 New approaches to the analysis of personal constructs in person perception. In J. Cole (Ed.), *Nebraska symposium on motivation, Vol. 24*. University of Nebraska Press.
- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. 1968 A multi-dimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 284-294.
- 斉藤 勇(編) 1983 人間関係の心理学 誠信書房.
- 斉藤 勇・沼上泰子 1971 対人認知の基礎的研究——身体的特徴から受ける印象の形成(1) 日本社会心理学会第

- 12 回大会発表論文集, 25-27.
- 佐野勝男・榎田 仁 1972 精研式文章完成法テスト解説 (新訂版)——成人用——金子書房.
- 佐野勝男・榎田 仁 1986 SCT 入門テキスト 金子書房.
- SAS Institute (Ed.) 1985 *SAS USER'S GUIDE: Statistics, Ver. 5 Edition*. Cary, NC: SAS Institute Inc..
- Schneider, D. J. 1973 Implicit personality theory: A review. *Psychological Bulletin*, 79, 294-309.
- Scott, W. A., Osgood, D. W., & Peterson, C. 1979 *Cognitive structure: Theory and measurement of individual differences*. Winston & Sons.
- Secord, P. F. 1955 Personalities in faces: IV. A descriptive analysis of the perception of women's faces and the identification of some physiognomic determinants. *Journal of Psychology*, 39, 269-278.
- Secord, P. F. 1958 Facial features and inference processes in interpersonal perception. In R. Tagiuri & L. Petrullo (Eds.), *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford: Stanford University Press.
- Secord, P. F. & Berscheid, E. 1963 Stereotyping and the generality of implicit personality theory. *Journal of Personality*, 31, 65-78.
- Secord, P. F. & Bevan, W. 1956 Personalities in faces: III. A crosscultural comparison of impressions of physiognomy and personality in faces. *Journal of Social Psychology*, 43, 282-286.
- Secord, P. F., Dukes, W. F., & Bevan, W. 1954 Personalities in faces: I. An experiment in social perceiving. *Genetic Psychology Monographs*, 49, 231-279.
- Secord, P. F. & Muthard, J. E. 1955 Personalities in faces: II. Individual differences in the perception of women's faces. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 50, 238-242.
- 瀬谷正敏 1977 対人関係の心理 (現代の心理学 5) 培風館.
- Sheldon, W. H. 1954 *Atlas of men*. New York: MacMillan.
- Sheldon, W. H., Dupertuis, C. W., & McDermott, E. 1970 *Atlas of men: a guide for somatotyping the adult male at all ages*. Darien, CT: Locoleon, Hafner.
- Sheldon, W. H. & Stevens, S. S. 1942 *The varieties of temperament*. New York: Harper.
- Sheldon, W. H., Stevens, S. S., & Tucker, W. B. 1940 *The varieties of human physique*. New York: Harper.
- 曾野佐紀子 1971 他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析——文章完成法テスト (SCT) を用いての Person Perception の一研究——, 心理学研究, 42, 185-196.
- Staffieri, J. R. 1967 A study of social stereotype of body image in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7, 101-104.
- Staffieri, J. R. 1972 Body build and behavioral expectancies in young females. *Developmental Psychology*, 6, 125-127.
- Stagner, R. 1961 *Psychology of Personality*.
- Stritch, T. M. & Secord, P. F. 1956 Personalities in faces: VI. Interaction effects in the perception of faces. *Journal of Personality*, 24, 270-284.
- Taft, R. 1955 The ability to judge people. *Psychological Bulletin*, 52, 1-21.
- 竹内 啓 (監修) 1987 SAS によるデータ解析入門 (SAS で学ぶ統計的データ解析 I) 東京大学出版会.
- Tucker, L. R. & Messick, S. 1963 An individual differences model for multidimensional scaling. *Psychometrika*, 28, 333-369.
- 津村俊充 1977 印象形成過程に関する研究 (1)——性格特性相互の関連性について——日本心理学会第 41 回大会発表論文集, 1112-1113.
- Vannoy, J. S. 1965 Generality of cognitive complexity-simplicity as a personality construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 385-396.

- Vernon, P. E. 1933 Some characteristics of the good judge of personality. *Journal of Social Psychology*, 4, 42-58.
- 若林明雄 1982 パーソナリティ認知次元の検討 (2)——パーソナリティ特性次元と3気質類型について——日本心理学会第46回大会発表論文集, 419.
- Walters, H. A. & Jackson, D. N. 1966 Group and individual regularities in trait inference: A multidimensional scaling analysis. *Multivariate Behavioral Research*, 1, 145-163.
- Warner, R. M. & Sugarman, D. B. 1986 Attributions of personality based on physical appearance, speech, and handwriting. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 792-799.
- Warr, P. B. & Haycock, V. 1970 Scales for a British Personality Differential. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 328-337.
- Wells, W. D. & Siegel, B. 1961 Stereotyped somatotypes. *Psychological Reports*, 8, 77-78.
- Werner, C. & Latané, B. 1976 Responsiveness and communication medium in dynamic interaction. *Bulletin of Psychological Society*, 8, 13-15.
- Williams, E. 1975 Medium or message: Communications medium as a determinant of interpersonal evaluation. *Sociometry*, 38, 119-130.
- Wishner, J. 1960 Reanalysis of "impressions of personality,". *Psychological Review*, 67, 96-112.
- 柳井晴夫・高木広文 (編著) 1986 多変量解析ハンドブック 現代数学社.
- Zuckerman, M., Amidon, M., Bishop, S., & Pomerantz, S. 1982 Face and tone of voice in the communication of deception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 347-357.